

(財)北九州市芸術文化振興財団
委託調査

北九州芸術劇場
事業評価調査
〔報告書〕

9

2013年3月
ニッセイ基礎研究所

◎ はじめに

この報告書は、(財)北九州市芸術文化振興財団から委託を受けて、ニッセイ基礎研究所が実施した「北九州芸術劇場 事業評価調査(その9)」の成果をとりまとめたものである。

近年、行財政改革や説明責任(アカウンタビリティ)への関心の高まりなどを背景に、政府や公共団体の施策や事業を評価する「政策評価」が広がっており、地方公共団体においても、政策評価から施策評価、事務事業評価という評価体系が定着している。しかし、文化施設や文化事業の評価には、その特性を踏まえた独自の評価体系や指標が必要であるという認識が広がり、各地で行われている評価も徐々に成熟したものとなりつつある。

北九州芸術劇場は、そうした動きに先立ち、2003年度の開館当初から独自の事業評価調査に継続的に取り組み、かつ、その成果を公開しており、公立文化施設の事業評価モデルとして全国から注目されている。

9年目にあたる2011年度調査では、継続調査として①劇場の運営データの分析、②主催事業および提携・協力事業公演の観客アンケート調査、③貸館利用に関するアンケート調査、④経済波及効果とパブリシティ効果の試算を実施した。その結果からは、これまでと同様に、北九州芸術劇場が着実に成果をあげ、北九州市の芸術文化の創造拠点・発信拠点として、鑑賞者や利用者から広く認知、支持されていることがうかがえる。来年度、開館から10周年を迎える北九州芸術劇場が、これまでの事業や運営の蓄積としてどんな成果を生み出してきたか、10年間の総括が期待されるところである。

末筆ではあるが、2003年度以降、9ヶ年にわたり、この貴重な調査の機会を与えていただいた(財)北九州市芸術文化振興財団、劇場スタッフの方々、ならびに調査にご協力いただいた観客や利用者の方々に心より感謝申し上げるとともに、本調査の成果が今後の北九州芸術劇場の運営に有効に活用され、より一層、意義のある事業や活動が展開されることを願うものである。

2013年3月
ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室

◎ 目 次

序章 調査研究の目的・内容と本報告書の構成	i
-----------------------------	---

[本編]

第1章 2011年度事業の概要と実績	3
第2章 観客の特性と観客からみた評価	14
第3章 貸館利用者からみた評価	23
第4章 経済波及効果とパブリシティ効果	28
第5章 評価フレームに基づいた事業評価結果	33

[資料編]

資料Ⅰ 観客調査結果	資-1
資料Ⅱ 貸館利用者調査結果	資-55
資料Ⅲ 経済波及効果	資-85
資料Ⅳ パブリシティ一覧	資-99

序章 調査研究の目的・内容と本報告書の構成

1. 調査研究の目的・内容

(1) 調査研究の目的

本調査研究は、2003年8月に開館した北九州芸術劇場について、毎年、事業や運営の評価に関する調査を行うとともに、その調査結果に基づいて、より良い劇場運営のあり方を検討することを目的としている。

9年目にあたる2011年度は、03年度あるいは04年度から継続して実施している、次の4つの調査(「継続調査」)

- ①劇場運営に関する基礎データの収集・分析
- ②公演に来場した観客を対象としたアンケート調査による公演事業に関する評価
- ③貸館利用者を対象としたアンケート調査による施設利用に関する評価
- ④北九州芸術劇場の経済波及効果とパブリシティ効果の算出

を実施した。

(2) 調査の内容

①劇場運営基礎データの収集・分析

事業数、公演回数、入場者・参加者数、施設稼働率など、劇場運営に関する基礎データを整理し、03年度から9ヶ年の経年分析を行なった。

②公演に来場した観客に対するアンケート調査

北九州芸術劇場の自主事業と提携・協力事業公演の観客を対象に、以下の2つの視点に基づいたアンケート調査を実施した(詳細は、p.資-1～資-54参照)。

- 事業評価の基礎となる北九州芸術劇場の施設やサービス、公演内容等に関する観客の満足度、ニーズの把握
- 劇場運営の基礎となる観客の属性(年齢、性別、居住地)、北九州芸術劇場における鑑賞行動(情報入手経路、鑑賞の動機、北九州芸術劇場での鑑賞回数)、日頃の鑑賞行動(鑑賞頻度、鑑賞ジャンルなど)など、観客特性の把握

③貸館利用者を対象としたアンケート調査の分析

貸館利用者を対象に05年度から実施している「施設利用に関するアンケート調査」の結果について、11年度分をとりまとめた(詳細は、p.資-55～資-83参照)。

④経済波及効果、パブリシティ効果の把握分析

産業連関表を用いて、劇場の事業や運営がもたらす経済波及効果を試算するとともに、雇用効果の把握を行なった(詳細は、p.資-85～資-97参照)。また、パブリシティ効果について、その概要を整理し、金額換算による規模を算出した(詳細は、p.資-99～資-104参照)。

2. 本報告書の構成

本報告書は、各調査結果の概要、ならびに事業評価の基本フレームと評価結果を整理した「本編」と、調査の詳細データ等を整理した「資料編」の二編から構成されており、それぞれの内

容は以下のとおりである。

(1) 本編

本編は、それぞれ次の内容からなる5つの章によって構成されている。

- 「第1章 2011年度事業の概要と実績」
劇場運営の基礎データならびに事業収支を整理した。
- 「第2章 観客の特性と観客からみた評価」
自主事業と提携・協力事業公演に来場した観客に対するアンケート調査の結果から、①観客の属性、②公演や劇場に関する意見（公演やサービスへの満足度など）、③日頃の鑑賞行動について、整理・分析を行った。
- 「第3章 貸館利用者からみた評価」
貸館利用者に対するアンケート調査の結果から、①劇場の施設、運営や対応に関する満足度、②重視項目について、調査結果の整理・分析を行った。
- 「第4章 経済波及効果とパブリシティ効果」
産業連関表を用いた経済波及効果、雇用効果、新聞掲載記事の金額換算によるパブリシティ効果を算出した。
- 「第5章 評価フレームに基づいた事業評価結果」
第1章から第4章までの調査結果を総合的に分析するため、次の評価フレームに沿って調査や評価の結果、改善のポイントなどを整理した。
 - A 劇場の設置目的：
鑑賞系事業、創造系事業、普及系事業、市民文化活動支援、地域への貢献
 - B 運営・管理： 場の提供・支援、施設のホスピタリティ・サービス、施設の維持管理
 - C 経営： 経営体制、リサーチ&マーケティング、経営努力

(2) 資料編

本編で整理・分析した調査の手法、結果などをとりまとめ、資料編として掲載した。

- 資料Ⅰ「観客調査結果」では、11年度の自主事業と提携・協力事業公演に来場した観客を対象に実施したアンケート調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅱ「貸館利用者調査結果」では、07年度～11年度の5ヶ年の調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅲ「経済波及効果」では、11年度の経済波及効果の基本構造、事業ごとの最終需要と消費支出など、経済波及効果、雇用効果算出のための分析資料を掲載した。
- 資料Ⅳ「パブリシティ一覧」では、金額換算の基礎となった11年度の新聞記事データの一覧を掲載した。

◎ 調査研究体制

ニッセイ基礎研究所

吉本光宏(主席研究員・芸術文化プロジェクト室長)

大澤寅雄(芸術文化プロジェクト室 研究員)

北九州芸術劇場
事業評価調査
[本編]

第1章 2011年度事業の概要と実績

本章ではまず、事業評価の基本となる北九州芸術劇場の事業の概要、入場者数や稼働率、収支状況など、2011年度の事業の実績について、過去データとともに整理した。

1. 事業の実績

まず、北九州芸術劇場の事業の基本方針と11年度の事業概要は次のとおりである。

(1) 事業の基本方針

北九州芸術劇場では、「創る」「育つ」「観る」をキーワードにした事業展開が行われている。それぞれの目的や考え方、事業の内容は次のとおりである。

- **【創る】**: 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。
- **【育つ】**: アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。
- **【観る】**: 見る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

(2) 事業の内容と実績、入場者数

- 11年度もこうした3つのコンセプトに基づき、自主事業全体で、33本の事業・231回の公演・アクティビティが行われ、32,284人が公演鑑賞やアクティビティに参加した(図表1-1)。

図表1-1 事業実績の概要(03年度～11年度)

【事業数・公演数・入場者数】

	2003年度			2004年度			2005年度		
	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数
創造事業	3	35	13,350	4	15	3,292	6	45	9,332
公演事業	15	35	22,079	23	46	26,361	24	42	21,294
提携・協力事業	5	8	7,382	6	15	6,211	6	13	6,642
オープニング企画	2	2	1,592	—	—	—	—	—	—
演劇祭	2	9	987	2	9	1,231	2	7	2,779
公演事業 計	27	89	45,390	35	85	37,095	38	107	40,047
	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数
学芸事業	—	219	2,404	—	320	4,734	—	297	6,327
総合計	27	308	47,794	35	405	41,829	38	404	46,374
公演事業の総座席数と入場率	総席数		入場率	総席数		入場率	総席数		入場率
	50,756		89.4%	41,808		88.7%	48,575		82.4%
	2006年度			2007年度			2008年度		
	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数
創造事業	7	61	27,107	5	24	5,224	8	41	12,320
公演事業	18	45	29,813	22	49	32,378	15	33	18,164
提携・協力事業	7	16	7,259	11	28	11,869	5	12	3,895
演劇祭	2	8	1,110	3	8	1,724	1	28	1,689
公演事業 計	34	130	65,289	41	109	51,195	29	114	36,068
	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数
学芸事業	—	291	6,758	—	283	6,200	—	279	10,577
総合計	34	421	72,047	41	392	57,395	29	393	46,645
公演事業の総座席数と入場率	総席数		入場率	総席数		入場率	総席数		入場率
	70,065		92.7%	60,036		85.3%	41,580		82.7%
	2009年度			2010年度			2011年度		
	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数
創造事業	6	40	12,841	5	21	3,124	5	37	10,846
公演事業	16	42	19,439	17	39	24,229	19	42	14,036
提携・協力事業	5	16	3,947	9	25	6,427	8	12	2,229
演劇祭	1	7	556	1	17	1,799	1	44	1,605
公演事業 計	28	105	36,783	32	102	35,579	33	135	28,716
	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数
学芸事業	—	175	5,889	—	178	5,404	—	96	3,568
総合計	28	280	42,672	32	280	40,983	33	231	32,284
公演事業の総座席数と入場率	総席数		入場率	総席数		入場率	総席数		入場率
	39,225		93.8%	38,447		92.5%	32,885		87.3%

※2008年度は、演劇祭は総座席数の設定をしていないため、演劇祭入場者数は入場率の算出から除いている。

※2008年度より演劇祭を「北九州演劇フェスティバル」として開催。

- 以下、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業ごとに、事業の内容と実績をとりまとめた。(11年度事業の実績一覧を図表1-2に整理した。)

①創る:創造事業

- 「創る」に対応した創造事業では、
 - 北九州芸術劇場プロデュースとして全国に発信する作品、「江戸の青空 弐」、「テトラポット」
 - 市民参加型の創造事業である、合唱物語「わたしの青い鳥2011」、「北九州パントマイム教室」
 - 演劇界の第一線で活躍する演出家を招き、地域の俳優によって国内外の魅力的な戯曲をリーディングとして上演する「リーディングセッション」

といった事業が実施された。

- 「江戸の青空 弐」は東京(11回)、廿日市(1回)、北九州(4回)で公演が行われた。
- 11年度は5事業で37回の公演が行われ、入場者数は10,846人となっている。10年度と比べると、事業数は同じ件数だが公演数が16回増加し、入場者数はおよそ3.5倍増加している(図表1-1)。
- 入場率では「テトラポット」の東京公演で99%、「リーディングセッションvol.18」で98%となっている。「江戸の青空 弐」の廿日市公演が54%となっているが、それ以外の公演の入場率は80%を超え、市民からの支持の高さがうかがえる。(図表1-2)。

②育つ:学芸事業

- 「育つ」に対応した学芸事業では、
 - 「アーティスト往来プログラム」として、演劇・ダンス分野から多彩な講師を招いた「インリーチ」、「アウトリーチ」、「勉強会」
 - 高校生や高校の演劇部顧問を対象に、大ホール、中劇場、小劇場、創造工房を活用した「高校生のための演劇塾2011」
 - 市民センターでの小学生から一般市民を対象としたアウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」のワークショップと公演「冬の盆」
 - 創造・公演(アウトリーチやワークショップ)参加として、合唱物語「わたしの青い鳥2011」、「北九州パントマイム教室」、「公共ホール演劇ネットワーク事業」など、学芸事業全体では、創造参加も含め、11事業で96回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数は3,568人となっている(図表1-2)。
- 10年度と比べると、アクティビティの回数、参加者数ともに減少している(10年度の実績は178回、5,404人)。減少の要因としては、「ドラマ・ワークショップ」、「学校出前演劇ワークショップ」及び「月1ダンス部」から「アーティスト往来プログラム」へと企画内容を転換したことが挙げられる。10年度までの「ドラマ・ワークショップ」では、同じ学校で複数回実施し、1校あたりの参加人数が多いため、参加の延人数に大きく貢献していた。
- 今年度からの「アーティスト往来プログラム」は、同じアーティストが「アウトリーチ」と「インリーチ」でアプローチの対象や内容を変化させることで、劇場と学校や地域との間に、より多様な関係を生み出そうとする意図がうかがえる。

③観る:公演事業

- 「観る」に対応した主催公演事業では、世界的に著名な演出家を迎えた「ピーター・ブルックの魔笛」をはじめ、イッセー尾形、キャラメルボックス、ナイロン100℃などの人気の高い小劇場・現代演劇公演、山海塾のダンス・現代舞踊公演、「月猫えほん音楽会」や「親指こぞうーブケッティーノ」といった子どもを対象とした公演など、幅広い観客層を対象とした公演が実施された。
- 09年度に新たに始まった北九州芸術劇場が注目する演劇人たちをバックアップする「ツドエmeets北九州」では、単なる招聘公演ではなく、劇場とカンパニーが人材・技術を交流させながらネットワークを広げ、カンパニーの事情に応じた柔軟な支援を行なった。
- 公演事業では19作品が上演され、公演数は42回、入場者数は14,036人となっている。10年度と比べると、公演数はやや増加したが、入場者数は減少している(10年度の実績は39回、24,229人)。これは、大ホールの公演が1本もなかったことが要因であるが、公演事業の入場率は87%と高く、19本のうち12本は90%以上を確保している(図表1-2)。

- 提携・協力事業では、伝統芸能や小劇場・現代演劇、ダンスなど8事業が上演され、公演数は12回、入場者数は2,229人であった。10年度と比べると、1事業あたりの公演数が少ない傾向にあり、公演数、入場者数ともに減少している(10年度の実績は25回、6,427人)。
- 創造事業、公演事業、提携・協力事業、フェスティバルを含めた公演事業全体の公演作品数は33本、公演数は135回、入場者数は28,716人である。公演事業の年間入場者数としては、開館後、最も少ない人数となっている(図表1-1)。

図表1-2 北九州芸術劇場 自主事業実績一覧(11年度)

1 創造事業

	公 演 名	会 場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	北九州芸術劇場プロデュース／市民参加企画 合唱物語「わたしの青い鳥2011」	中劇場	7/10	1	583	495	85%
2	北九州パントマイム教室（発表会）	創造工房	8/21	1	78	64	82%
3	北九州芸術劇場リーディングセッションvol.18「ズビズビ。」	小劇場	9/17～19	3	414	404	98%
	北九州芸術劇場リーディングセッションvol.19 「ロング・クリスマス・ディナー」	小劇場	12/17～19	3	404	357	88%
	計			6	818	761	93%
4	北九州芸術劇場プロデュース「江戸の青空 弐 〜惚れた晴れたの八百八町」東京公演	世田谷バブリック シアター	11/12～20	11	6,050	5,045	83%
	〃 廿二市公演	はつかいち文化ホー ルさくらびあ	12/7	1	734	395	54%
	〃 北九州公演	中劇場	12/9～11	4	2,436	2,159	89%
	計			16	9,220	7,599	82%
5	北九州芸術劇場プロデュース「テトラポット」北九州公演	小劇場	2/20～26	9	1,048	892	85%
	〃 東京公演	あうるすぽっと	3/2～4	4	1,050	1,035	99%
	計			13	2,098	1,927	92%
計				37	12,797	10,846	85%

2 公演事業

	公 演 名	会 場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	日韓合同公演「焼肉ドラゴン」	中劇場	4/16・17	2	1,100	955	87%
2	3軒茶屋婦人会「紅姉妹～べにしまい～」	中劇場	5/15	1	649	622	96%
3	「GGR グレンギャリー・グレン・ロス」	中劇場	6/22	1	610	551	90%
4	月猫えほん音楽会2011	中劇場	7/28	1	612	593	97%
5	ドラムストラック	中劇場	8/9	1	628	624	99%
6	スガンさんのやぎ	中劇場	8/12・13	2	568	455	80%
7	現代能楽集Ⅵ「奇っ怪 其の弐」	中劇場	9/10・11	2	1,142	1,127	99%
8	「イッセー尾形のこれからの生活2011in小倉」	中劇場	9/24・25	2	1,242	933	75%
9	人形劇俳優”たいらじょう”の世界 人形劇ミュージカル「オズの魔法使い」	中劇場	10/2	1	535	442	83%
10	キャラメルボックス 成井豊の世界名作劇場vol.3「飛ぶ教室」	中劇場	11/5・6	3	1,806	1,040	58%
11	万作・萬斎狂言	中劇場	11/23	2	1,348	1,315	98%
12	ラッパ屋第38回公演「ハズバンズ&ワイブズ」	中劇場	11/26	1	616	328	53%
13	ナイロン100℃ 37thSESSION「ノーアート・ノーライフ」	中劇場	12/3・4	2	1,124	1,066	95%
14	「90ミニッツ」	中劇場	1/6～8	3	1,824	1,824	100%
15	山海塾「あわせ鏡のはざまで一うつし」	中劇場	1/29	1	563	451	80%
16	「親指こぞうーブケッティーノ」公演	中劇場 (舞台上舞台)	2/17～19	5	250	242	97%
17	ツドエmeets北九州vol. 6「わが星」	小劇場	5/19～22	5	510	490	96%
	ツドエmeets北九州vol. 7「コスモスノサク。」	小劇場	11/26・27	3	312	264	85%
	計			8	822	754	92%
18	平成23年度公共ホール演劇ネットワーク事業 「劇団衛星のcockpit」	小劇場	9/10・11	3	165	153	93%
19	「ピーター・ブルックの魔笛」	中劇場	3/31	1	605	561	93%
計				42	16,209	14,036	87%

3 北九州演劇フェスティバル2012

1	牛島光太郎ワークショップ	京町銀天街	3/6	1	5	9	180%
	鳥公園ワークショップ	京町銀天街	3/13	1	5	5	100%
	井上大輔ワークショップ	京町銀天街	3/14	1	5	5	100%
	レジデンス 牛島光太郎「他人の話」	京町銀天街	3/6~9	-	-	10	-
	レジデンス 高山力造・穴迫信一・南波早 「おはなしドコロで」	京町銀天街	3/7~9	-	-	30	-
	レジデンス ストレッチカフェ	京町銀天街	3/13~16	-	-	33	-
	公演A 「まちのたまもの」	京町銀天街	3/11	1	32	31	97%
	公演B 鳥公園「すがれる」	京町銀天街	3/17	1	20	28	140%
	公演C 「京町ダンスパレード」	リバーウォーク ～京町銀天街	3/18	1	100	148	138%
	「京町小屋・寄席」	京町銀天街	3/10・17	13	500	717	132%
	ブレ企画、小屋来場者、京町小屋 オープニング・クロージング	京町銀天街	12月~3/18	17	-	269	-
	ダンスワークショップ	創造工房(WS)	3/9~11	5	45	43	96%
	「TOTOのCMダンスの続きをおどろう」	小劇場(発表)	3/11	1	96	52	54%
	リーディング&トーク 「3.11から1年 あの時、あれから、演劇人は」	小劇場	3/10	1	112	88	79%
	若手演劇人による演劇バトル 「シアターラボSB～不器用ですから」	小劇場	3/18	1	128	137	94%
計				44	1,048	1,605	153%

※入場者数にはワークショップやレジデンスの参加者、および観客と区別できない出演者の数を含む(入場率からは除く)。

4 提携・協力事業

	公 演 名	会 場	公演日	公演数	設定席数	入場数	入場率
1	第三回若扇会	大ホール	5/5	1	1,155	738	64%
2	イキウメ「散歩する侵略者」	中劇場	6/12	1	382	343	90%
3	南河内万歳一座 内藤裕敬プロデュース「七人の部長」	小劇場	7/29・30	2	272	264	97%
4	KAKUTA「ひとよ」	小劇場	11/12・13	2	272	232	85%
5	劇団太陽族「異郷の涙」	小劇場	2/4・5	2	240	170	71%
6	MONO第39回公演「少しはみ出て殴られた」	小劇場	3/3・4	2	272	252	93%
7	Co.山田うん公演「季節のない街」	小劇場	3/24・25	2	238	219	92%
8	リージョナルシアター事業(共催)	小劇場、創造工房	9/26~30	-	-	11	-
計				12	2,831	2,229	78%

※リージョナルシアター事業は入場率から除く。

合計(創造・公演・提携・協力事業)				135	32,885	28,716	87%
-------------------	--	--	--	-----	--------	--------	-----

5 学芸事業

	事 業 名	会 場	実施月	回数	対象	参加延人数・入場者数	受講(入場)者数
1	アーティスト往来プログラム						
	講師:山田うん インリーチ	赤坂小学校	5/16	1	教職員	7	7
	アウトリーチ	赤坂小学校	6/6・7	3	小学生	80	80
	ワークショップ「ダンスの時間ですよ」	大手町練習場	2/4	1	乳児～一般	32	32
	「冬の森ダンス」朝の森のなか編	山田緑地	2/5	1	高校生以上	7	7
	「冬の森ダンス」昼の芝生でほかほか編			1	乳児～一般	22	22
	講師:こふく劇場 アウトリーチ	赤崎小学校 高蔵小学校	6/28・29	3	小学生	95	95
	勉強会	創造工房	6/30	1	インターン等	17	17
	講師:伊藤キム「働く人のためのダンスワークショップ」	創造工房	8/27・28	2	社会人	32	32
	インリーチ	鞘ヶ谷小学校	8/29	1	教職員	4	4
	アウトリーチ	常磐高校 鞘ヶ谷小学校 小倉工業高校 榑安川電機	10/17・18 11/11, 12/7	6	高校生 小学生 社会人	133	133
	講師:阿部初美 インリーチ	北小倉小学校	7/21	1	教職員	11	11
	アウトリーチ	北小倉小学校	11/21・22	4	小学生	100	25
	勉強会	創造工房	10/28, 11/23	2	アシスタント等	13	13
	計			27		553	478

2	「高校生のための演劇塾2011」 モデル作品稽古	大ホール・中劇場 小劇場・創造工房	7/18~31	11	高校生・ 高校顧問	165	15
	〃 講座		8/1~3	3		345	115
	計			14		510	130
3	エンゲキで私忒忒、地域忒忒 ワークショップ	枝光北市民センター 小劇場ほか	10月~1月	20	地域住民	440	22
	〃 公演「冬の盆」	小劇場	1/28・29	2		242	242
	計			22		682	264
【創造・公演(アウトリーチ&ワークショップ)参加】							
4	ソドエmeets北九州vol. 6「わが星」 ワークショップ	小劇場	5/14~16	3	一般	45	15
5	合唱物語「わたしの青い鳥2011」 ワークショップ	中劇場ほか	5/26~7/9	14	小学生~一般	1,344	96
	〃 アウトリーチ	筒井小学校	6/3	1	小学生	35	35
6	月猫えほん音楽会2011 ワークショップ	小劇場	7/27	1	親子	16	16
7	内藤裕敬(南河内万歳一座)高校生向けレクチャー	創造工房	7/30	1	高校生	20	20
8	北九州パントマイム教室 ワークショップ	創造工房	8/17~21	5	小学3~6年生	95	19
9	人形劇俳優“たいらじょう”の世界	あかつき幼稚園	9/28・29	2	幼稚園児	37	37
	人形劇ミュージカル「オズの魔法使い」 アウトリーチ	子育てふれあい交流プラザ	9/28	1	幼児	30	30
10	平成23年度公共ホール演劇ネットワーク事業 「劇団衛星のコックピット」 アウトリーチ	藤木小学校	9/6・7	2	小学生	162	81
	〃 ワークショップ	創造工房	9/8	1	教職員	21	21
11	北九州芸術劇場プロデュース「テトラポット」 「若い人達のための演劇ワークショップ」 ワークショップ	小劇場	1/22	2	高校生 大学生 専門学生	18	18
	計			33		1,823	388
合計(学芸事業)				96		3,568	1,260
総 合 計				231		32,284	

④貸館事業

- 貸館事業では、市主催事業、財団主催事業も含め、11年度に公演や講演など、計254事業が開催された。公演・講演数は337回、貸館事業の入場者数は175,916人となっている。

⑤利用者数、利用件数

- 観客だけではなく、主催事業の出演者や関係者、貸館事業の利用者などを含めた北九州芸術劇場の利用者数、利用件数は図表1-3のとおりで、11年度には自主事業、貸館事業合わせて1,682件の利用があり、利用者数は約29万人となっている。そのうち、自主事業での利用件数は592件、利用者数は約3万6千人。貸館事業での利用件数は1,090件、利用者数は約25万人である。
- 10年度と比べて自主事業、貸館事業ともに利用件数は増えている。自主事業と貸館事業を含めた合計は、利用件数は増えたものの、利用者数は減少した。大ホールの貸館事業の利用件数は過去最多となっている。

図表1-3 利用者数、利用件数(03年度～11年度)

	2003年度				2004年度				2005年度			
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計
自主事業	23,937 (66)	22,890 (143)	7,402 (121)	54,229 (330)	22,445 (87)	29,970 (242)	16,996 (404)	69,411 (733)	13,034 (102)	33,153 (289)	14,592 (471)	60,779 (862)
貸館事業	93,100 (205)	41,524 (145)	10,769 (99)	145,393 (449)	175,273 (482)	71,901 (325)	13,626 (176)	260,800 (983)	160,673 (467)	55,644 (229)	10,478 (130)	226,795 (826)
合計	117,037 (271)	64,414 (288)	18,171 (220)	199,622 (779)	197,718 (569)	101,871 (567)	30,622 (580)	330,211 (1,716)	173,707 (569)	88,797 (518)	25,070 (601)	287,574 (1,688)

	2006年度				2007年度				2008年度			
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計
自主事業	26,027 (139)	29,814 (298)	15,651 (573)	71,492 (1,010)	34,015 (186)	29,182 (325)	17,837 (564)	81,034 (1,075)	17,877 (134)	17,699 (217)	14,661 (462)	50,237 (813)
貸館事業	134,966 (382)	55,050 (244)	8,853 (146)	198,869 (772)	132,444 (381)	58,491 (237)	10,772 (148)	201,707 (766)	133,686 (365)	77,324 (327)	17,281 (226)	228,291 (918)
合計	160,993 (521)	84,864 (542)	24,504 (719)	270,361 (1,782)	166,459 (567)	87,673 (562)	28,609 (712)	282,741 (1,841)	151,563 (499)	95,023 (544)	31,942 (688)	278,528 (1,731)

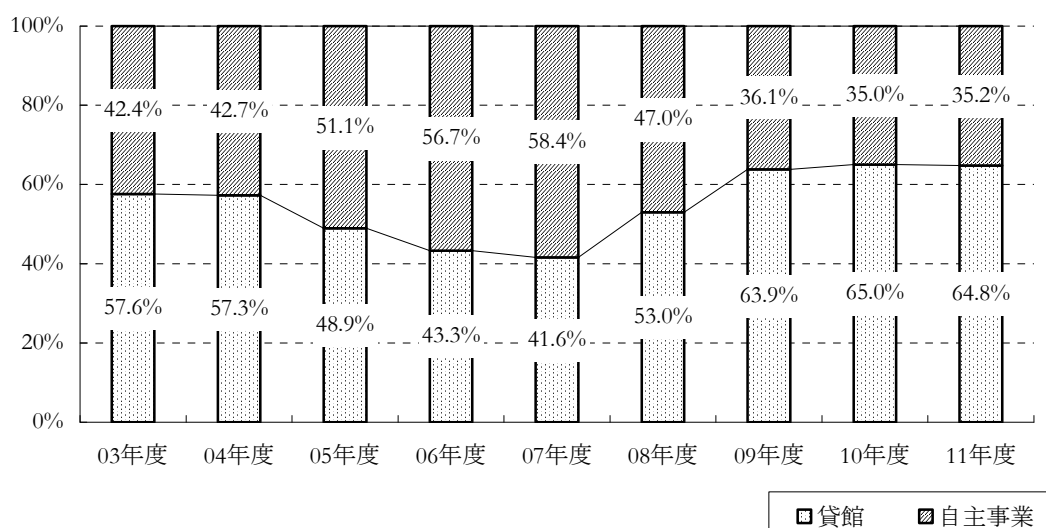
	2009年度				2010年度				2011年度			
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計
自主事業	7,625 (64)	22,087 (213)	12,873 (318)	42,585 (595)	21,429 (104)	16,140 (159)	12,457 (316)	50,026 (579)	2,979 (25)	20,838 (230)	11,947 (337)	35,764 (592)
貸館事業	138,611 (415)	86,166 (369)	18,186 (267)	242,963 (1,051)	155,767 (441)	88,614 (367)	16,967 (269)	261,348 (1,077)	163,922 (503)	70,958 (319)	19,011 (268)	253,891 (1,090)
合計	146,236 (479)	108,253 (582)	31,059 (585)	285,548 (1,646)	177,196 (545)	104,754 (526)	29,424 (585)	311,374 (1,656)	166,901 (528)	91,796 (549)	30,958 (605)	289,655 (1,682)

	累計
自主事業	515,557 (6,589)
貸館事業	2,020,057 (7,932)
合計	2,535,614 (14,521)

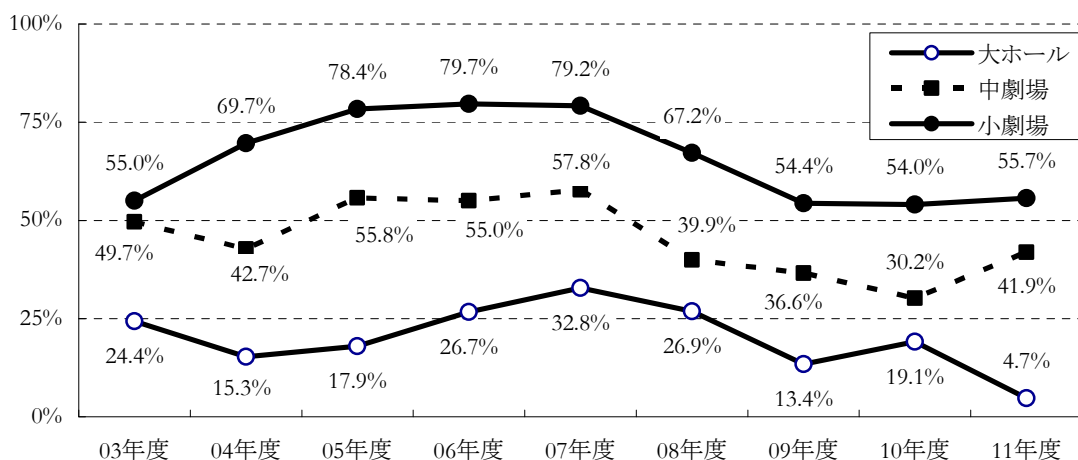
※上段の数字が利用者数(単位:人)、下段()内の数字は利用件数

- 自主事業と貸館事業の比率を利用件数ベースでみると、11年度は、自主事業が35.2%、貸館事業が64.8%と、貸館事業の利用割合が高くなっている(図表1-4)。
- ホールの規模別にみると、大ホールで貸館事業での利用が多く、中劇場と小劇場で自主事業の利用が多いことは、03年度からの変わらない傾向だが、11年度は大ホールの自主事業利用の比率がこれまでの実績で最も低く、貸館利用の会場として大ホールが定着してきたことがうかがえる。また、10年度に比べて中劇場と小劇場で自主事業利用の比率が伸びている(図表1-5)。
- 小劇場の自主事業比率が高いのは、リーディングセッションやツドエmeets北九州をはじめとする創造事業・創造参加の場として、中劇場では幅広い観客層を対象とした人気の高い公演事業に活用しているためであり、3つの劇場それぞれの役割と用途が明確になっているものと考えられる。

図表1-4 自主事業・貸館事業比率 [件数ベース](03年度～11年度)



図表1-5 ホール別の自主事業比率 [件数ベース](03年度～11年度)



(3) 施設稼働率

- 北九州芸術劇場の11年度の施設稼働率は、大ホールが77.0%、中劇場が74.0%、小劇場が78.3%である(図表1-6)。
- 3つのホールの稼働率は、開館年の03年度を除き、約70～80%で推移しており、2011年度の(財)地域創造の悉皆調査結果(2010年10月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72.2%)と比較して高い水準にある。

図表1-6 北九州芸術劇場の稼働率(03年度～11年度)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	99	100	83	219	207	220	223	189	222
利用対象日数	103	107	86	277	283	304	281	276	297
稼働率	96.1%	93.5%	96.5%	79.1%	73.1%	72.4%	79.4%	68.5%	74.7%

	2006年度			2007年度			2008年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	202	199	254	220	205	257	192	203	249
利用対象日数	285	282	306	290	289	300	257	260	295
稼働率	70.9%	70.6%	83.0%	75.9%	70.9%	85.7%	74.7%	78.1%	84.4%

	2009年度			2010年度			2011年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	194	212	221	215	197	225	211	202	234
利用対象日数	262	260	282	261	267	285	274	273	299
稼働率	74.0%	81.5%	78.4%	82.4%	73.8%	78.9%	77.0%	74.0%	78.3%

注) 稼働率は「稼働日数／利用対象日数」、利用対象日数は保守点検日を除いたもの

2. 事業費の内訳と収支

次に、北九州芸術劇場の事業費の財源内訳と収支について、過去8ケ年と同様の分析を行った。

(1) 事業費の財源と事業支出の内訳

- 北九州芸術劇場の11年度の事業費は約2億3,000万円となっており、10年度からやや増加しているものの、過去の事業費と比べて2番目に規模の少ない事業費となっている。
- 財源内訳をみると、チケット収入が約1億2,000万円で全体の52.9%、市の補助金が約8,100万円で34.9%、文化庁と(財)地域創造による外部資金が約2,900万円で12.2%となっている。チケット収入と外部資金で事業費の約3分の2(65.1%)をカバーしている(図表1-7)。
- 全国平均の試算値[※]と比較すると、11年度のチケット収入の割合は平均を上回っている。チケット収入は、08年度:42.2%、09年度:65.2%、10年度:68.1%と割合が増加し続けたが、11年度は減少した。

※(財)地域創造の悉皆調査結果(2007年)から、指定管理施設の事業費の財源内訳の平均金額を試算すると、「設置者からの補助金・委託費」が52.7%、「事業収入」が36.6%、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」が10.7%である。

※指定管理施設の平成18年度決算金額平均値の「収入」欄から、「事業補助金」、「事業委託費」(いずれも設置者からの収入)、「事業収入」、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」の4項目を事業費財源と設定し、それぞれの内訳比率を算出した。

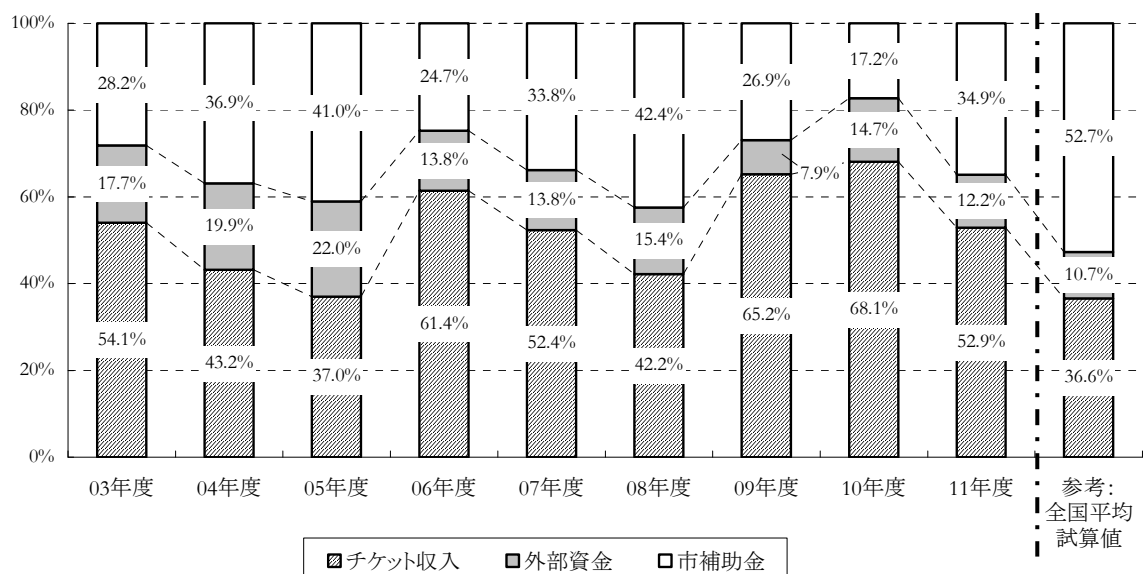
図表1-7 事業費の財源内訳(03年度～11年度)

	2003年度		2004年度		2005年度	
	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳
チケット収入	215,389	54.1%	145,429	43.2%	110,060	37.0%
市補助金	112,225	28.2%	124,198	36.9%	121,965	41.0%
外部資金	70,700	17.7%	67,000	19.9%	65,295	22.0%
文化庁	49,000	(12.3%)	49,000	(14.6%)	45,795	15.4%
地域創造	10,000	(2.5%)	18,000	(5.3%)	19,500	6.6%
日本財団	11,700	(2.9%)	—	—	—	—
協賛金	—	—	—	—	—	—
計	398,314	100.0%	336,627	100.0%	297,320	100.0%

	2006年度		2007年度		2008年度	
	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳
チケット収入	263,901	61.4%	197,355	52.4%	135,979	42.2%
市補助金	106,363	24.7%	127,456	33.8%	136,854	42.4%
外部資金	59,517	13.8%	52,051	13.8%	49,579	15.4%
文化庁	45,800	(10.7%)	36,600	(9.7%)	27,400	(8.5%)
地域創造	13,717	(3.2%)	15,451	(4.1%)	22,179	(6.9%)
日本財団	—	—	—	—	—	—
協賛金	—	—	—	—	—	—
計	429,781	100.0%	376,862	100.0%	322,412	100.0%

	2009年度		2010年度		2011年度	
	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳
チケット収入	202,004	65.2%	149,051	68.1%	123,355	52.9%
市補助金	83,331	26.9%	37,726	17.2%	81,302	34.9%
外部資金	24,432	7.9%	32,072	14.7%	28,509	12.2%
文化庁	18,000	(5.8%)	11,000	(5.0%)	26,902	(11.5%)
地域創造	6,432	(2.1%)	10,572	(4.8%)	1,607	(0.7%)
日本財団	—	—	—	—	—	—
協賛金	—	—	10,500	(4.8%)	—	—
計	309,767	100.0%	218,849	100.0%	233,166	100.0%

図表1-8 事業費の比率(03年度～11年度)



(2) 事業収支

- 11年度の事業費について、収入の予算額と決算額の差異は事業収入で約1,700万円の減収、補助金等収入は約5,600万円の減収となっている。11年度は事業規模が縮小した結果、収入も減少した形になった。
- 劇場の運営、事業の実施にあたって、経費節減の努力を行っていることとともに、積極的な営業努力を行なっていることがうかがえる。

図表1-9 事業収入、補助金等収入の予算額・決算額(03年度～11年度)

(千円)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	194,300	215,389	△ 21,089	146,346	145,429	917	130,500	110,060	20,440
下段：全体に占める割合	48.6%	54.1%	—	41.1%	43.2%	—	37.3%	37.0%	—
補助金等収入	205,700	182,925	22,775	209,300	191,198	18,102	219,500	187,260	32,240
	51.4%	45.9%	—	58.9%	56.8%	—	62.7%	63.0%	—
市補助金	135,000	112,225	22,775	135,000	124,198	10,802	151,000	121,965	29,035
助成金	70,700	70,700	0	74,300	67,000	7,300	68,500	65,295	3,205

	2006年度			2007年度			2008年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	265,709	263,901	1,808	212,173	197,355	14,818	269,172	135,979	133,193
	53.9%	61.4%	—	50.2%	52.4%	—	54.1%	42.2%	—
補助金等収入	227,531	165,880	61,651	210,800	179,507	31,293	228,412	186,433	41,979
	46.1%	38.6%	—	49.8%	47.6%	—	45.9%	57.8%	—
市補助金	145,000	106,363	38,637	149,000	127,456	21,544	149,000	136,854	12,146
助成金	82,531	59,517	23,014	61,800	52,051	9,749	79,412	49,579	29,833

	2009年度			2010年度			2011年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	157,949	202,004	△ 44,055	110,503	149,051	△ 38,548	140,284	123,355	16,929
	44.7%	65.2%	—	43.9%	68.1%	—	45.8%	52.9%	—
補助金等収入	195,470	107,763	87,707	141,200	69,798	71,402	166,136	109,811	56,325
	55.3%	34.8%	—	56.1%	31.9%	—	54.2%	47.1%	—
市補助金	135,000	83,331	51,669	108,000	37,726	70,274	128,000	81,302	46,698
助成金	60,470	24,432	36,038	33,200	32,072	1,128	38,136	28,509	9,627

第2章 観客の特性と観客からみた評価

本章では、開館以来継続的に実施している、主催事業および提携・協力事業の公演に來場した観客に対するアンケート調査の結果から、2011年度の観客の特性や、観客からみた北九州芸術劇場に対する評価を整理、分析した。

1. 観客調査の実施要領

- 調査の対象: 2011年度に実施した主催事業および提携・協力事業公演 31公演*
- 配布・回収方法: 各公演初日の開演時に配布、終演時に回収
- 実施時期: 2011年4月16日～2012年3月24日

※3月31日に実施された公演「ピーター・ブルックの魔笛」は、アンケートの入力作業の都合上、2012年度の主催事業に含めて集計作業を行うものとして2011年度の観客調査から省略している。

※1月28～29日に実施された「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」の公演「冬の盆」については、通常の配布方法と異なっていたために回収がゼロ件となっており、配布対象の公演から除外した。

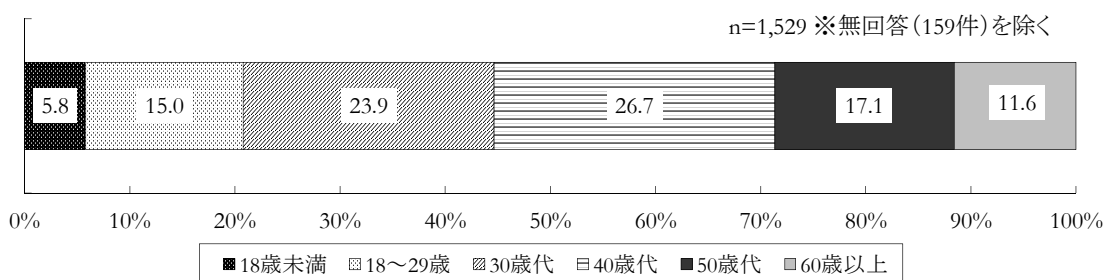
- 有効回答数(回収率): 1,688件、回収率: 16.7% (配布数: 10,104件)

2. 観客調査の結果概要

(1) 観客(アンケート回答者)の属性 (p.資-10～19)

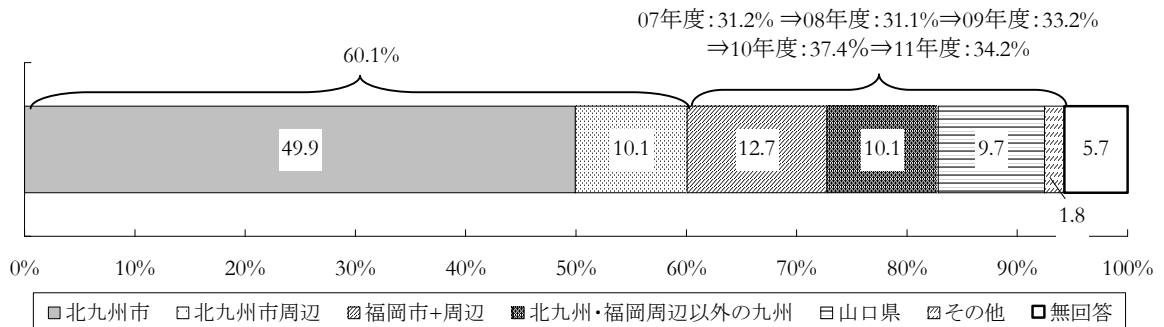
- 観客は、女性が77.7%、男性が22.3%と女性が多い。ジャンルによって若干男女比は異なり、「音楽劇」、「ダンス・現代舞踊」、「小劇場・現代演劇」では全体に比べて男性の割合が高い傾向がある。
- 平均年齢は41.4歳。年齢層に大きな偏りはなく、幅広い年齢層が来場している(図表2-1)。平均年齢に関しては、03年度が45.5歳で、04年から08年度までは42.0歳～43.4歳の範囲で上下し、10年度は40.2歳と過去に比べて低年齢化し、11年度には若干高齢化して41.4歳となった。過去8年間の推移を見ると一定の年齢を維持できている。
- ジャンルによって年齢構成は異なり、「古典芸能」で年齢層が高い(平均年齢: 52.9歳)。

図表2-1 年齢層(11年度)



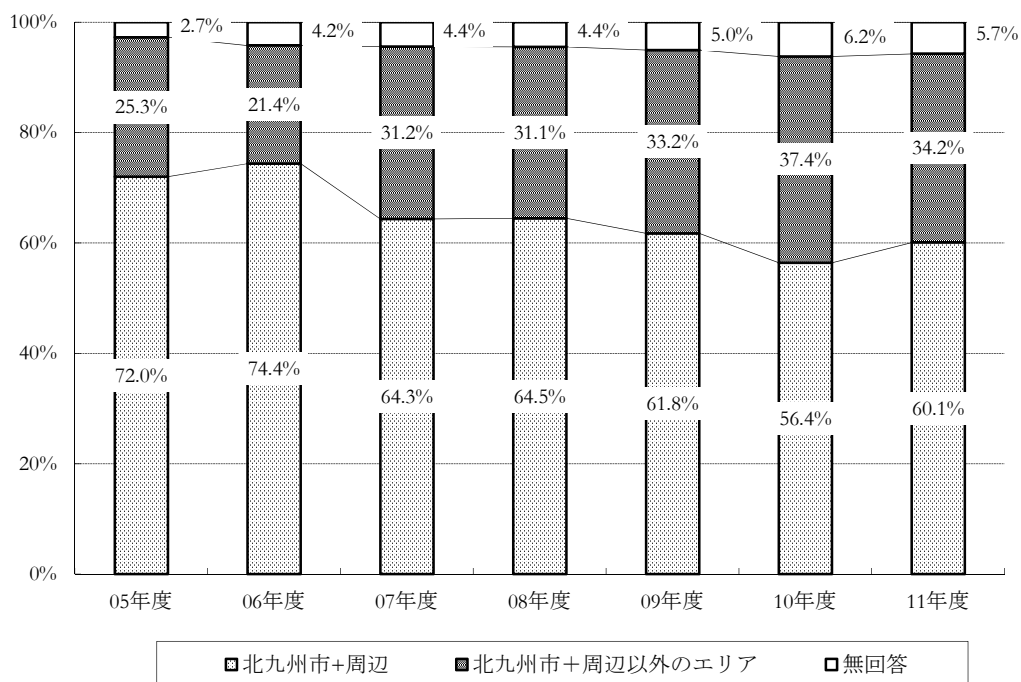
- 居住地域は、北九州市周辺を含めた市域からの来場者が60.1%(うち北九州市内が49.9%)である。福岡市域や福岡県以外の九州各県、山口県、その他からの11年度の来場者は34.2%で、07年度以降は3割以上を占めている(図表2-2)。

図表2-2 居住地域(11年度)



- 観客の居住地域の経年推移を見ると、07年度以降は北九州市と周辺以外のエリア（福岡市と周辺、北九州・福岡周辺以外の九州、山口県など）の割合が3割を超え、08年度以来は北九州市+周辺が減少する傾向にあったが、11年度では下げ止まり、北九州市+周辺は約6割となっている。

図表2-3 居住地域の経年推移(05年度～11年度)



- チケットクラブには回答者の約2割(22.7%)が入会している。入会していない場合、今後入会意向があるのは15.3%である。

(2) 北九州芸術劇場での公演鑑賞の状況

① 来場公演のジャンル(p.資-22～23)

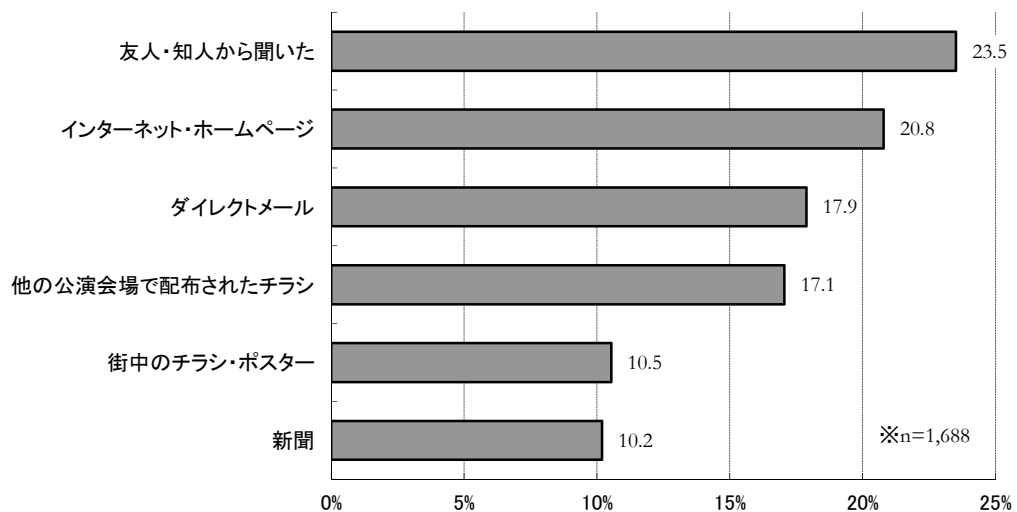
- 回答者が来場した公演のジャンルは、「小劇場・現代演劇」が約7割(76.1%)を占める。
※アンケート配布公演31公演のうち26公演が「小劇場・現代演劇」であることによる。
- 年齢別に来場公演のジャンルをみると、いずれの年代でも「小劇場・現代演劇」の割合が高い。また、60歳以上では「古典芸能」の割合が高い。
- 「今日が初めて」という回答者の場合、「小劇場・現代演劇」の割合が75.1%と、北九州芸術

劇場で初めて鑑賞した回答者の4人に3人が「小劇場・現代演劇」に来場した。

②公演情報の入手経路(p.資-24～25)

- 公演情報の入手経路は、全体では「友人・知人から聞いた」(23.5%)の割合が最も高く、次いで、「インターネット・ホームページ」(20.8%)、「ダイレクトメール」(17.9%)、「他の公演会場で配布されたチラシ」(17.1%)となっている(図表2-4)。
- 開館年度から継続して「友人・知人から聞いた」への回答割合が最も高く、10年度は初めて「インターネット・ホームページ」が最も高い割合(22.4%)となったが、11年度は再度「友人・知人から聞いた」が最も高い結果となった。

図表2-4 公演情報の入手経路(11年度) ※10%以上回答があった項目を、回答の多い順に掲載



- 公演情報の入手経路を、年齢別、北九州芸術劇場での鑑賞経験別に見る(図表2-5)。まず年齢別では、18歳未満、18～29歳、60歳以上は「友人・知人から聞いた」、30歳代は「インターネット・ホームページ」、40歳代は「他の公演会場で配布されたチラシ」、50歳代は「ダイレクトメール」の割合が最も高い。「新聞」は年齢層が高いほど割合が高くなっている。
- 18歳未満では「街中のチラシ・ポスター」、18～29歳と40歳代では、「インターネット・ホームページ」が第2位となっている。
- また、北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、北九州芸術劇場での鑑賞経験が6回以上のグループでは、「ダイレクトメール」が最も割合が高い。一方、5回以下のグループでは、「友人・知人から聞いた」が最も高く、次いで「インターネット・ホームページ」となっている。
- 劇場での鑑賞経験によって情報の入手経路は特徴があるが、「インターネット・ホームページ」はいずれの鑑賞頻度でも18～24%の回答がある。鑑賞頻度に関わらず、便利な情報入手ツールとして使われていることがうかがえる。

図表2-5 年齢別、北九州芸術劇場での鑑賞経験別 公演情報の入手経路(11年度)

n=1,688(単位:%)

		友人・知人から聞いた	インターネット・ホームページ	ダイレクトメール	他の公演会場で配布されたチラシ	街中のチラシ・ポスター	新聞
全体		23.5	20.8	17.9	17.1	10.5	10.2
年齢層	18歳未満	38.2	10.1	1.1	3.4	14.6	6.7
	18～29歳	31.9	27.1	12.7	18.8	13.5	2.2
	30歳代	21.6	29.3	21.4	18.9	11.0	7.4
	40歳代	18.6	20.6	20.1	21.1	10.8	8.3
	50歳代	21.1	20.3	22.6	11.5	9.6	16.9
	60歳以上	24.9	4.5	18.6	14.7	6.8	20.3
鑑賞経験	今日が初めて	34.1	18.5	5.8	6.6	8.4	11.0
	1～2回	30.9	18.4	12.9	12.4	10.1	5.5
	3～5回	25.4	21.9	12.0	11.7	9.4	12.3
	6～10回	19.0	22.1	26.0	17.8	13.2	8.1
	11回以上	10.9	24.3	32.9	34.7	12.4	10.4

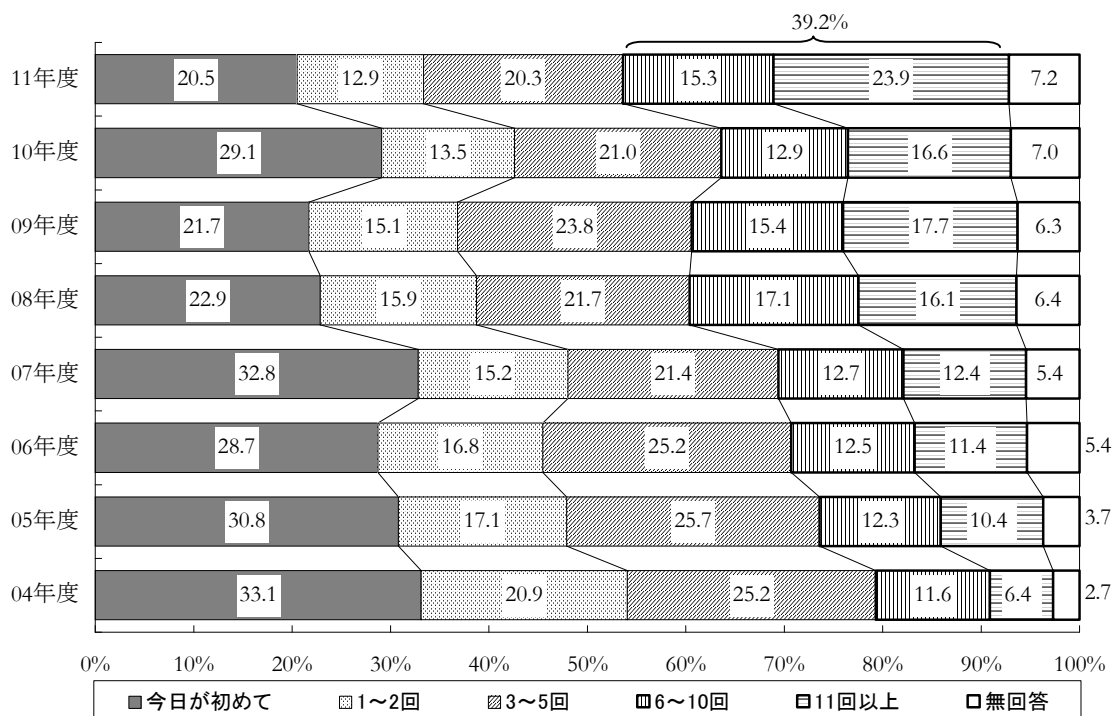
③公演に来た理由(p.資-26～27)

- 公演に来た理由は、「出演者・出演団体が好きだから」(51.7%)、「公演内容が面白そうだったから」(50.7%)への回答が多い。18歳未満、18～29歳、60歳以上は「公演内容が面白そうだったから」の割合が最も高く、その他の年代では「出演者・出演団体が好きだから」が最も高い。

④北九州芸術劇場での鑑賞経験(p.資-46～47)

- 北九州芸術劇場での鑑賞経験は「11回以上」(23.9%)の割合が最も高いが、「1～2回」から「11回以上」まで大差はなく、来場者の鑑賞経験は幅広い。過去の推移を見ると、「11回以上」が最も高い割合となったのは11年度が初めてである。

図表2-6 北九州芸術劇場での鑑賞経験(04年度～11年度)



- 観客の北九州芸術劇場での鑑賞経験が多様であるのは04年度調査からの特徴であるが、年々劇場での鑑賞経験の多い観客(来場経験が6回以上)が増えており、11年度は約4割(39.2%)となっている(図表2-6)。6回以上の鑑賞経験者の割合が高いのは、ジャンル別では「小劇場・現代演劇」、年齢別では「40歳代」以上である。

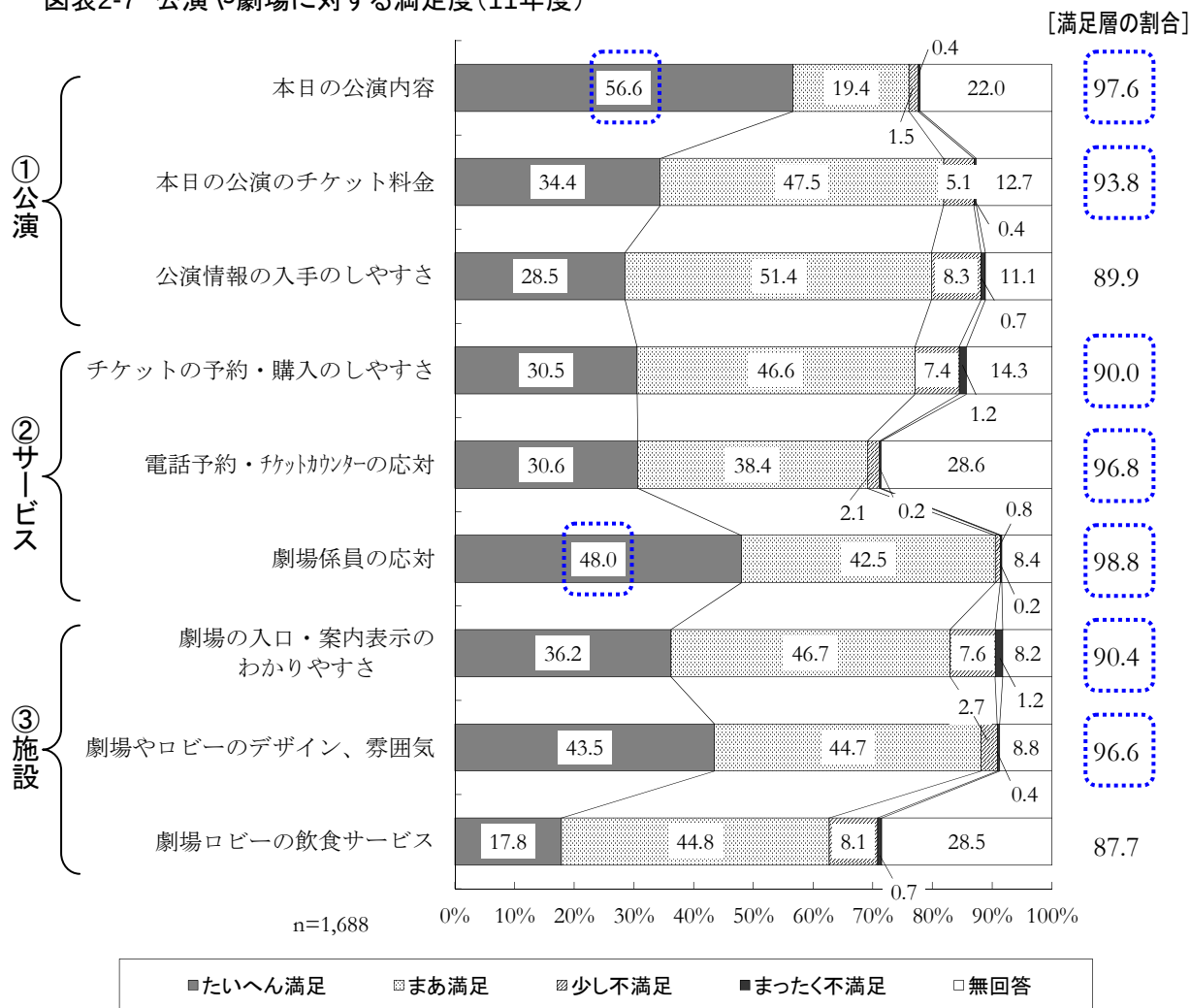
⑤公演前後の飲食やショッピング(p.資-28～29)

- 来場者の55.7%が公演前後に飲食あるいはショッピングをしており、平均金額は、飲食の場合が約1,491円(飲食をしている回答者の割合:全体の45.8%)、ショッピングの場合が約4,909円(ショッピングをしている回答者の割合:全体の24.0%)である。

(3) 公演や劇場に対する満足度(p.資-30～38)

- 満足層の割合(「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く)が90%以上を占めるのは、「本日の公演内容」、「本日の公演のチケット料金」、「チケットの予約・購入のしやすさ」、「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場係員の応対」、「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」の7項目である(図表2-7)。

図表2-7 公演や劇場に対する満足度(11年度)



※満足層の割合:「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

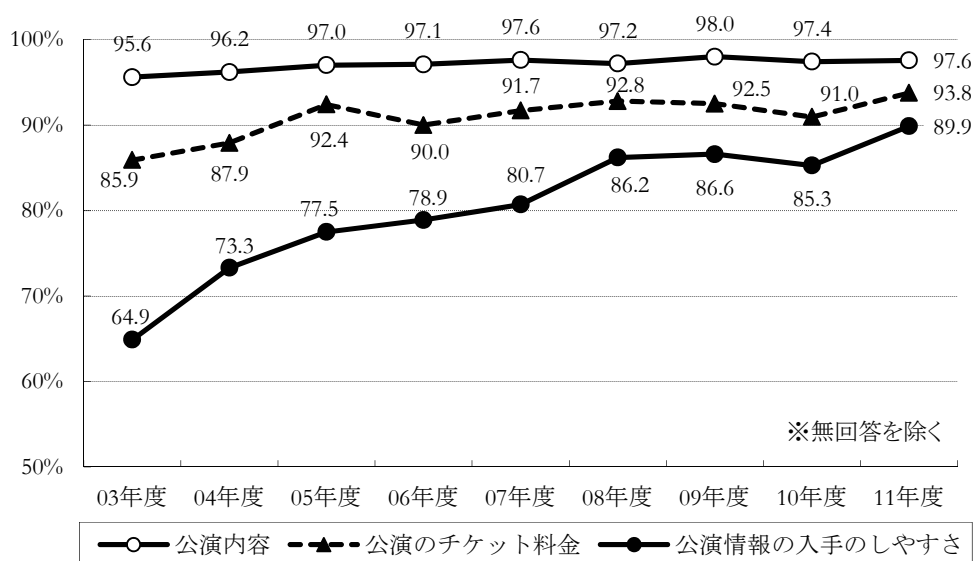
- 特に、「本日の公演内容」、「劇場係員の応対」の2項目については、「たいへん満足」の割合も、それぞれ56.6%、48.0%と高い評価となっている。

- 年齢別にみると、いずれの項目も年齢層が高くなるほど満足度は低くなる傾向がある。60歳以上では、ほぼすべての項目で「たいへん満足」の割合が低い。特に情報入手や、劇場のハード面に関する項目でその傾向は顕著である。
- 無回答が多い「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場ロビーの飲食サービス」については、利用したことがない人が多いと考えられる。
- 次に、満足度に関する9項目を、①公演、②サービス、③施設の3つに分けて、満足層の割合の経年変化を見よう(図表2-8～2-10)。

①公演について(図表2-8)

- 「公演内容」については、03年度から継続して満足層の割合が顕著に高く、観客からの評価は極めて高い。
- 「公演のチケット料金」も05年度以降、90%以上の高い満足度を維持している。「公演内容」への満足度の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも大きく関わっていると考えられる。
- 開館当初満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、満足度が向上し、11年度は満足層の割合が89.9%となっている。
- 11年度は「公演のチケット料金」と「公演情報の入手のしやすさ」で、開館以来の推移で最も高い満足度となっている。

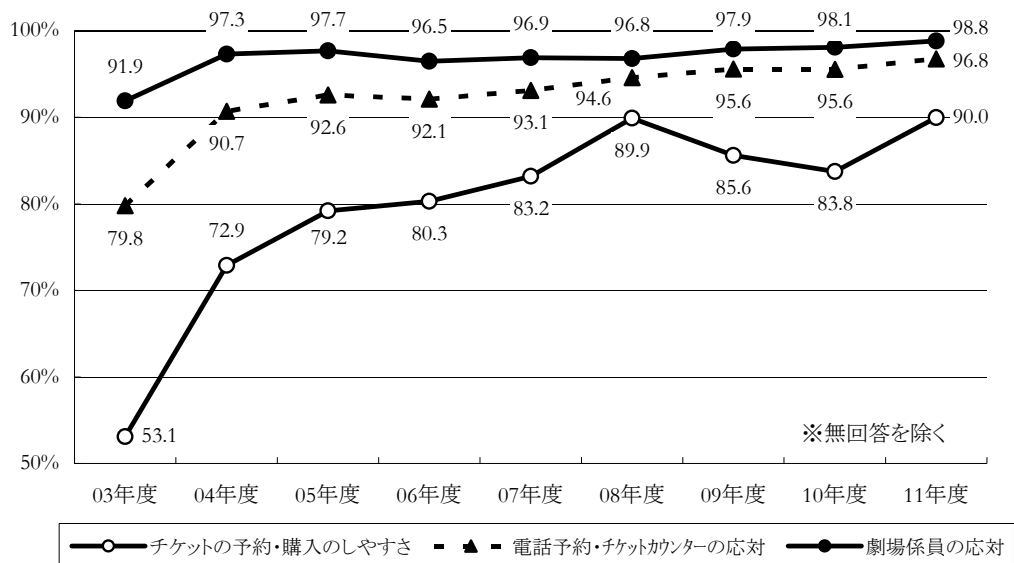
図表2-8 公演関連項目に関する満足層の割合(03年度～11年度)



②サービスについて(図表2-9)

- 「劇場係員の応対」は開館当初から、「電話予約・チケットカウンターの応対」は04年度から満足層の割合が90%を超えており、そのまま高い満足度を維持している。
- 開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、満足度の伸びが大きい。ホームページからのオンラインチケット購入が可能となった11年度は90.0%と過去に比べて最も高い割合となっており、「たいへん満足」の割合(無回答を除く)も35.6%と高い割合となっている。
- 11年度はサービスに関わる3項目すべてにおいて、開館以来の推移で最も高い満足度となっている。

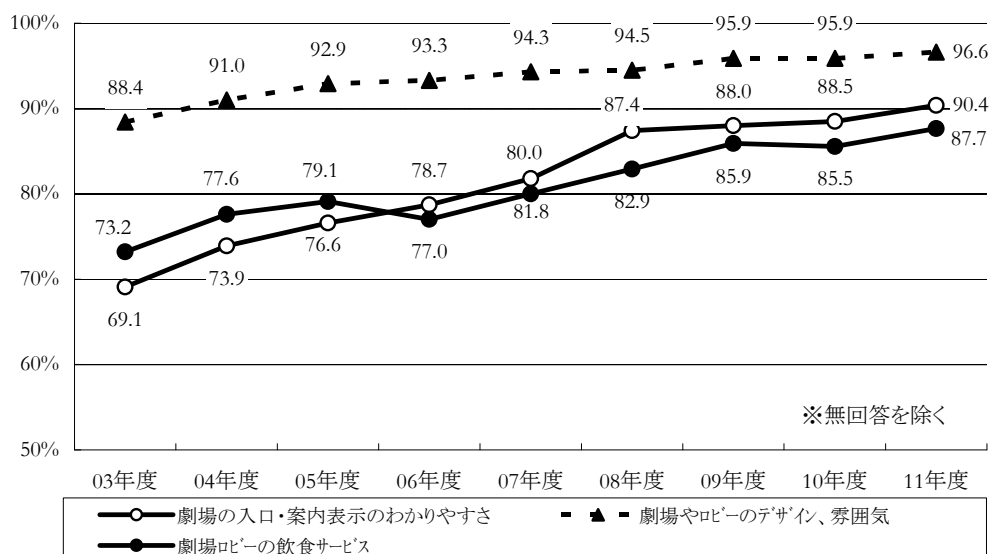
図表2-9 サービス関連項目に関する満足層の割合(03年度～11年度)



③施設について(図表2-10)

- 施設に関わる3項目のうち、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は、開館当初から満足層の割合が高く、そのまま高い水準を維持している。
- 一方、「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」は、複合施設である故の動線の複雑さもあり、開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かったが、年々満足度が高まっており、11年度は90.4%まで向上している。これは、観客が慣れてきたこともあるが、案内表示の増設や既存サイン文字の大型化、駐車場エレベーター入口での音声案内など劇場側の工夫や努力の成果が大きいといえよう。
- 11年度は施設に関わる3項目すべてにおいて、開館以来の推移で最も高い満足度となっている。

図表2-10 施設関連項目に関する満足層の割合(03年度～11年度)



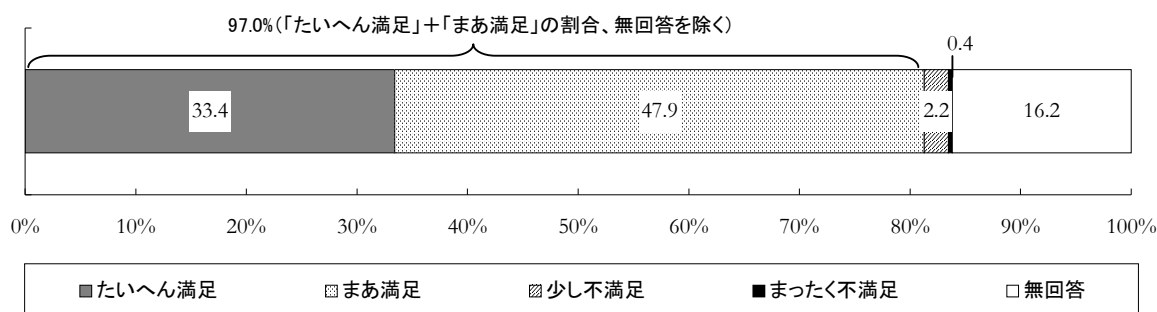
- ①公演、②サービス、③施設、いずれについても、すでに満足度が高い項目は高さを堅持

している。

④総合的な満足度について

- 劇場に関する総合的な満足度は、満足層の割合が97.0%（無回答を除く）。全体では、「たいへん満足」の割合が33.4%、「まあ満足」の割合が47.9%となっている（図表2-11）。

図表2-11 総合的な満足度（11年度）



（4）劇場の運営方針について（p.資-39～41）

- 北九州芸術劇場の基本方針の「観る」、「創る」、「育つ」については、いずれも90%以上が賛同している（「ぜひやってほしい」＋「まあやってほしい」の割合。無回答を除く）（図表2-12）。
- 「観る」については、「ぜひやってほしい」が77.7%と高い割合となっている（本アンケートが鑑賞者を対象としたアンケートであることには留意が必要である）。「創る」、「育つ」については、「観る」と比べると低いとはいえ、「ぜひやってほしい」が約51～54%と約半数を占める。これは03年度からの傾向である。
- 「創る」、「育つ」とともに、29歳以下の若い世代で「ぜひやってほしい」と積極的に賛同する割合が高い。

図表2-12 運営方針への賛同度（11年度）

n=1,688

運営方針	ぜひやってほしい	まあやってほしい	あまりやる必要はない	まったくやる必要はない	無回答	賛同する人の割合	賛同しない人の割合
観る	77.7%	14.5%	0.8%	0.2%	6.9%	99.0%	1.0%
創る	53.6%	34.4%	3.8%	0.2%	8.1%	95.6%	4.4%
育つ	51.3%	35.6%	4.3%	0.5%	8.4%	94.8%	5.2%

※賛同する人の割合：「ぜひやってほしい」＋「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

（5）日頃の鑑賞活動について

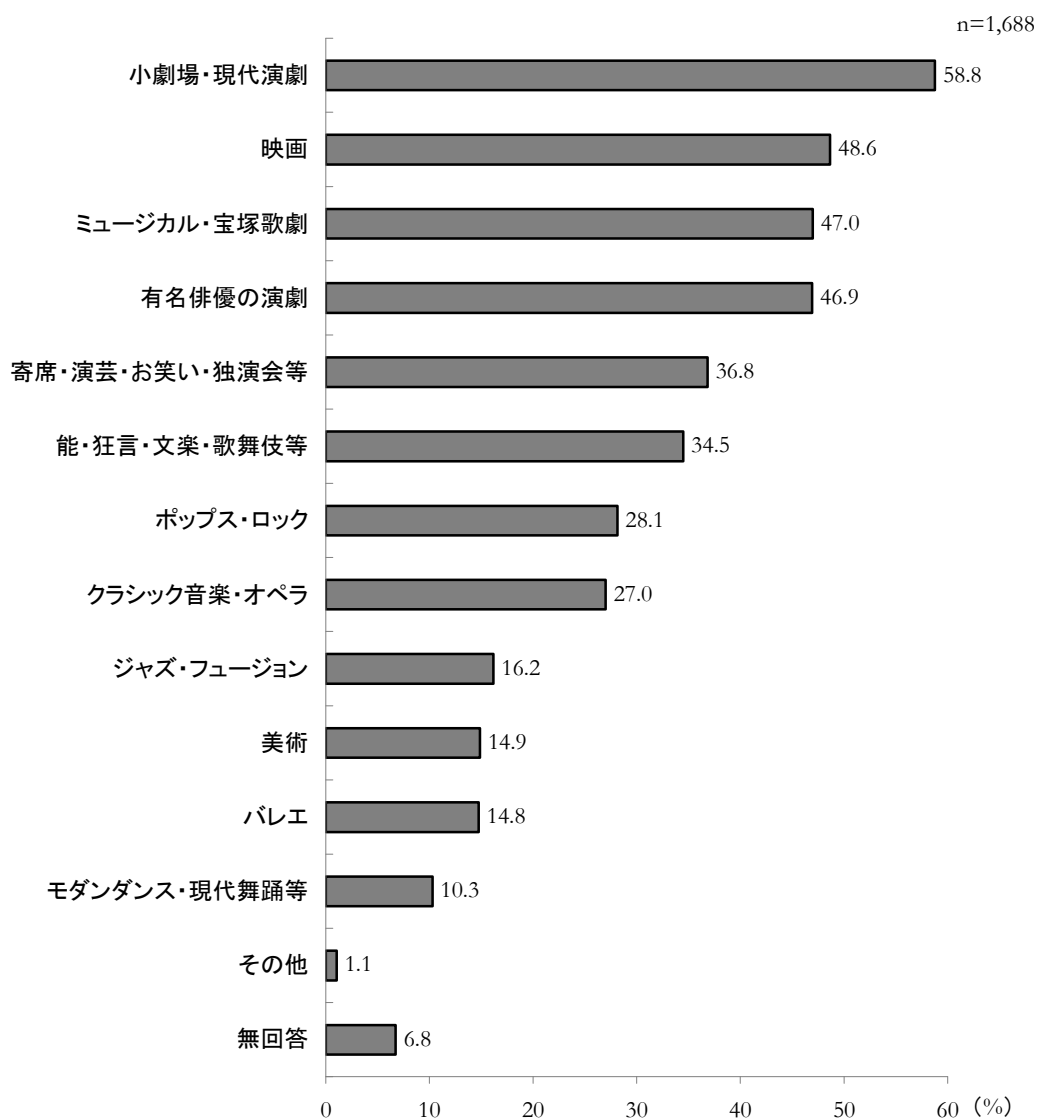
①日頃コンサートや演劇に出かける頻度（p.資-44～45）

- 日頃コンサートや演劇に出かける頻度は、「年に3～4回程度」（22.5%）、「年に1～2回程度」（18.2%）、「年に5～9回」（15.7%）となっており、日頃の舞台芸術の鑑賞頻度は多様である。
- 北九州芸術劇場で11回以上の鑑賞経験がある場合、月1回以上コンサートや演劇に出かける割合は62.1%を占める。北九州芸術劇場での鑑賞が初めてのグループでは、年に2回以下の頻度の割合が51.4%を占めている。

②興味のあるジャンル(p.資-48～50)

- 普段興味を持っているジャンルについては、「小劇場・現代演劇」(58.8%)、「映画」(48.6%)、「ミュージカル・宝塚歌劇」(47.0%)、「有名俳優の演劇」(46.9%)への回答割合が高く、興味のあるジャンルは多様である(図表2-13)。
- 興味のあるジャンルは、性別や年齢で特徴がある。性別でみると、男性は「小劇場・現代演劇」、「映画」、「ミュージカル・宝塚歌劇」、女性は「小劇場・現代演劇」、「有名俳優の演劇」、「映画」という順で回答割合が高い。
- 年齢別でみると、18歳未満は「映画」、18歳以上50歳代以下は「小劇場・現代演劇」、60歳以上は「能・狂言・文楽・歌舞伎等」への回答割合が他の年齢層に比べて高い。
- 北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、鑑賞経験が多いほど、「小劇場・現代演劇」、「有名俳優の演劇」、「ミュージカル・宝塚歌劇」への興味は高い。また、北九州芸術劇場での鑑賞経験が11回以上では、ほとんどすべての項目について回答割合が高く、舞台芸術以外にも、さまざまな文化・芸術に興味を持っていることがうかがえる。

図表2-13 普段興味のあるジャンル(11年度)



第3章 貸館利用者からみた評価

1. 利用者調査の実施要領

- 調査の対象:2011年度の貸館利用者(団体)
- 配布・回収方法:利用当日に配布、回収(後日ファックス、郵送での回収も受付)
- 配布件数:250件
- 有効回答数(回収率): 163件(65.2%)

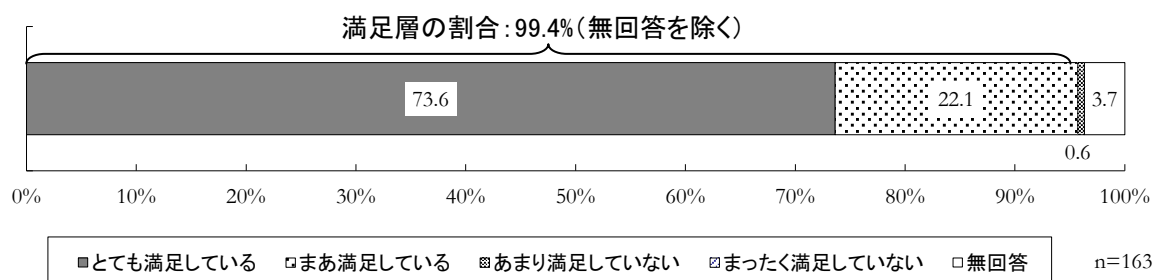
2. 利用者調査の結果概要

※本調査は、統計的な分析を目的とした調査ではなく、有効回答数も少ないため、アンケート結果の記述にあたっては、割合(%)とともに回答数を併記している。

(1) 劇場の使いごちに関する総合的な満足度(p.資-62)

- 劇場の使いごちに関する総合的な満足度は、「とても満足」が73.6%(120件)、「まあ満足」が22.1%(36件)で、満足層の割合(「とても満足」+「まあ満足」と回答した割合、無回答を除く)は99.4%と大変高い。

図表3-1 総合的な満足度【11年度】



(2) 施設に関する意見(p.資-63～67)

- 施設に関する7項目については、「搬入・搬出がやりやすい」、「劇場の広さ(客席数)がちょうどよい」以外の5項目で、肯定的な評価をしている割合(「はい」+「どちらかといえば『はい』」、無回答を除く)は95%以上と大変高い。とくに「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がいよい」、「舞台設備・機器が充実している」は100%となっている。
- また、「はい」という積極的な評価の割合も高く、特に「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がいよい」、「舞台設備・機器が充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」の4項目は、「はい」が90%以上である(図表3-2)。
- 「はい」という積極的な評価の割合について、07年度からの経年変化をみると、「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がいよい」は5年間連続で9割以上が「はい」と回答している(p.資-65)。
- 11年度は、10年度と比べて「搬入・搬出がやりやすい」、「舞台設備・機器が充実している」、「舞台裏の施設・設備が使いやすい」、「設備・機器などを安全に使用できた」で「はい」への回答が増加している。「搬入・搬出がやりやすい」については、他の項目に比べて満足層の割合、「はい」への回答ともに少ないものの、満足層の割合は93.8%となっている。利用者への搬入・搬出に関する説明や案内が周知されてきていること、利用者が慣れてきている

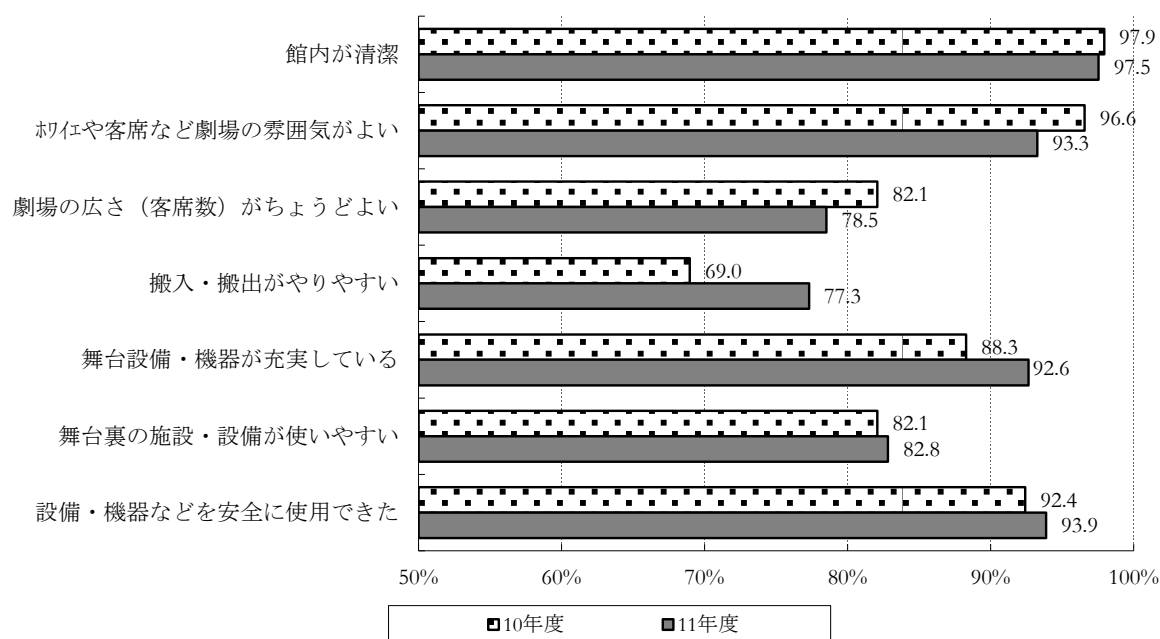
ことがうかがえる(図表3-2)。

※搬入・搬出については、複合施設である故の制限、駐車場からの動線の難しさ等が、意見記述欄にも課題として記入されることが多いが、打合せ時に説明・案内を周知する、施設側(リバーウォーク北九州)と協議・調整する等の対策を講じている。

図表3-2 施設(ハード)に関する意見【11年度】

n=163(単位: %)	「はい」	どちらか といえば 「はい」	どちらか といえば 「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」+ど ちらかとい えば「はい」 (除無回答)
館内が清潔	97.5	2.5	0.0	0.0	0.0	100.0
ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい	93.3	6.7	0.0	0.0	0.0	100.0
劇場の広さ(客席数)がちょうどよい	78.5	16.0	3.7	1.8	0.0	94.5
搬入・搬出がやりやすい	77.3	14.7	4.9	1.2	1.8	93.8
舞台設備・機器が充実している	92.6	6.7	0.0	0.0	0.6	100.0
舞台裏の施設・設備が使いやすい	82.8	12.9	2.5	0.6	1.2	96.9
設備・機器などを安全に使用できた	93.9	4.9	0.6	0.0	0.6	99.4

図表3-3 施設(ハード)に関する意見「はい」の回答割合比較【10年度・11年度】



(3) 運営や応対に関する意見(p.資-68～73)

- 運営、応対に関する12項目についても、「現在の開館時間は適当」以外の11項目で、肯定的な評価をしている割合が95%以上と高くなっている。また、「はい」という積極的に評価する割合も高い(図表3-4)。
- 「はい」という積極的な評価の割合については、「事務スタッフの応対がよい」が06年度以降6年間連続で、09年度から項目を加えた「当日の対応が適切」、「フロントスタッフの応対がよい」は3年間連続で9割以上が「はい」と回答している(p.資-71)。11年度は、10年度と比べて、「施設利用や予約情報が入手しやすい」、「利用問い合わせや予約が円滑」、「事前打ち合わせが円滑」、「技術スタッフの応対がよい」、「施設の利用に関する説明が適切」、「事故や非常時の対応等に対する説明が適切」、「現在の開館時間は適当」で「はい」への回答割合が高くなっている(図表3-5)。その一方で「当日の対応が適切」、「事務スタッフの応

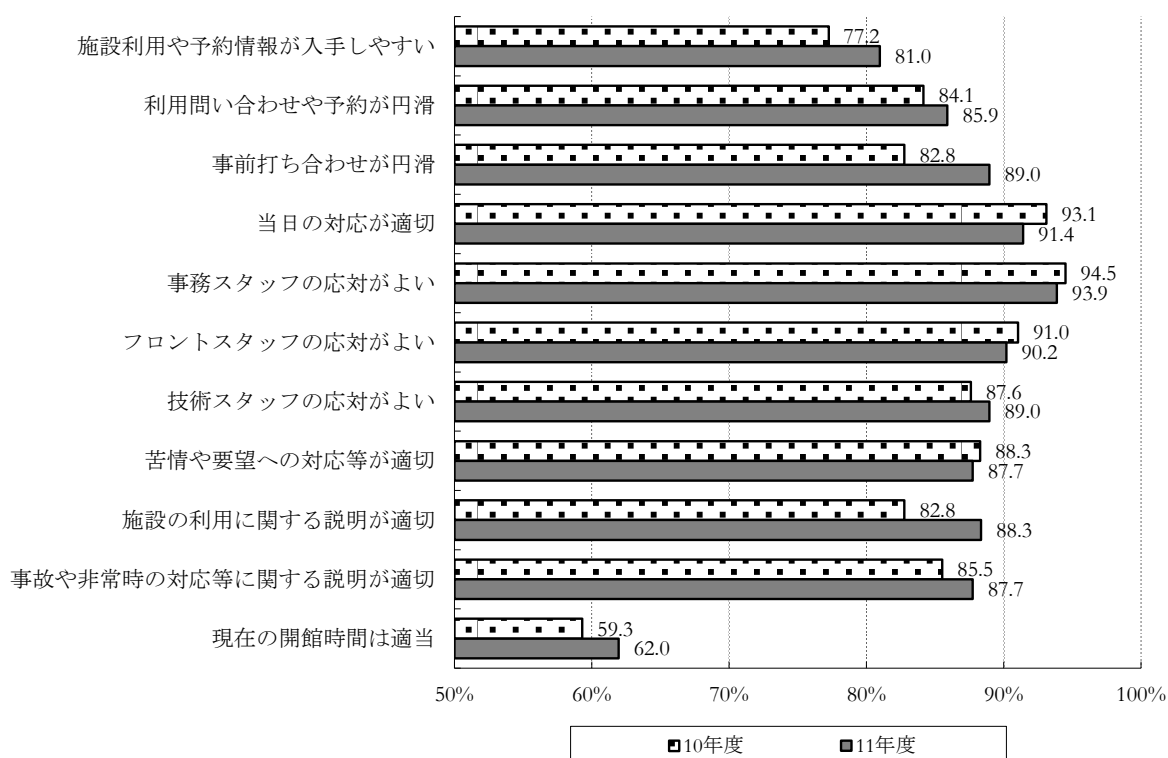
対がよい」、「フロントスタッフの対応がよい」、「苦情や要望への対応が適切」は減少している。

- 「現在の開館時間は適当である」については、他の項目に比べると「はい」の割合が低い。これは管理規則で10時から22時と定められており、より長い開館時間を求める意見や、仕込み等のために柔軟な利用時間の設定を求める意見があがっている。ただし、過去の推移を見ると「はい」という評価が増加し続けており、理解の浸透がうかがえる。

図表3-4 運営や対応(ソフト)に関する意見【11年度】

	「はい」	どちら かとい えば「はい」	どちら かとい えば「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」+ どちらかとい えば「はい」(除無 回答)
n=163(単位:%)						
施設利用や予約情報が入手しやすい	81.0	14.1	1.8	0.0	3.1	98.1
利用問い合わせや予約が円滑	85.9	8.0	2.5	0.0	3.7	97.5
事前打ち合わせが円滑	89.0	6.7	1.2	0.6	2.5	98.1
当日の対応が適切	91.4	5.5	1.2	0.0	1.8	98.8
事務スタッフの対応がよい	93.9	4.3	0.6	0.0	1.2	99.4
フロントスタッフの対応がよい	90.2	6.7	0.0	0.0	3.1	100.0
技術スタッフの対応がよい	89.0	8.0	0.6	0.0	2.5	99.4
苦情や要望への対応等が適切	87.7	8.0	0.6	0.0	3.7	99.4
施設の利用に関する説明が適切	88.3	6.1	1.2	0.0	4.3	98.7
事故や非常時の対応等に関する説明が適切	87.7	8.0	2.5	0.0	1.8	97.5
現在の開館時間は適当	62.0	19.6	12.9	3.7	1.8	83.1

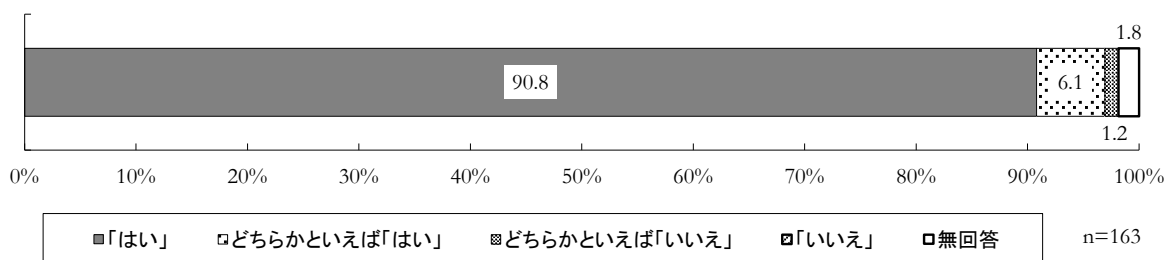
図表3-5 運営や対応(ソフト)に関する意見「はい」の回答割合比較【10年度・11年度】



(4) 今後の利用の意向(p.資-73)

- 「機会があればまた利用したい」については、「はい」が90.8%(148件)と高い割合を占めており、「どちらかといえば『いいえ』」は2件、「いいえ」は0件であった。利用者の今後の利用意向は大変高い。
- 今後の利用意向の高さは、貸館事業全体への満足度の高さを示しているものであると考えられる。

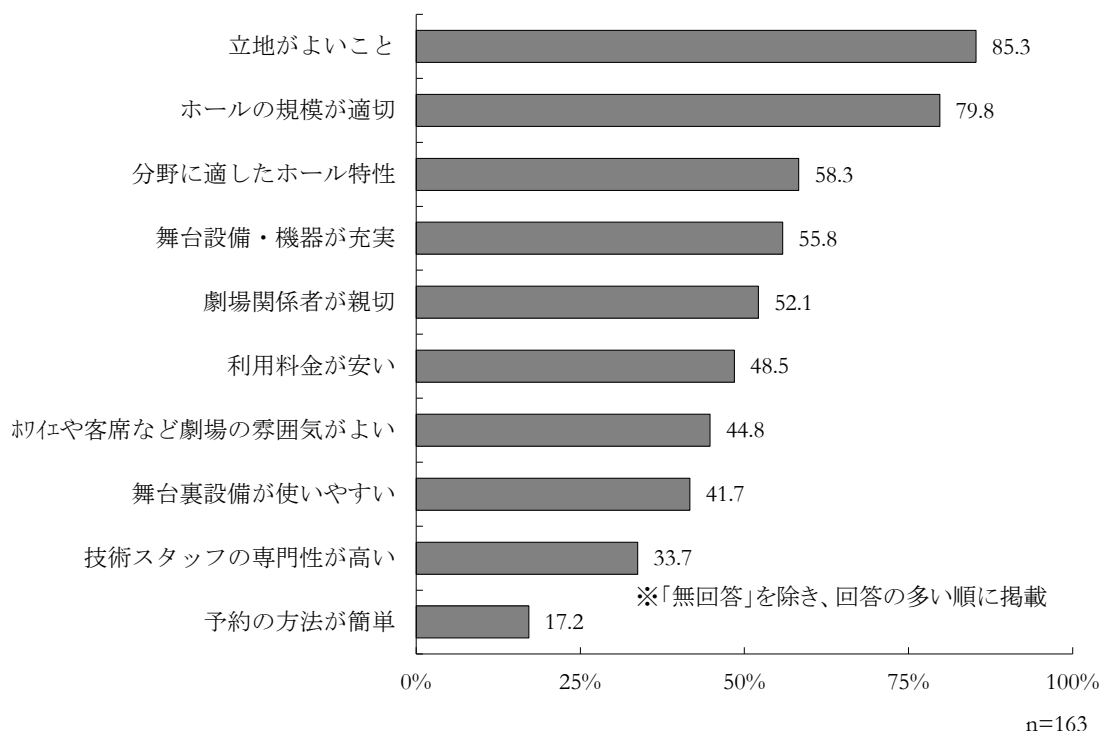
図表3-6 今後の利用の意向【11年度】



(5) 利用の際、重視すること(p.資-74～76)

- 利用の際重視することとしては、「立地がよいこと」(85.3%・139件)と「ホールの規模が適切」(79.8%・130件)への回答が多い。
- そのほか、「分野に適したホール特性」、「舞台設備・機器が充実」、「劇場関係者が親切」、「利用料金が安い」も約50%の回答となっている。

図表3-7 利用の際、重視すること【11年度】

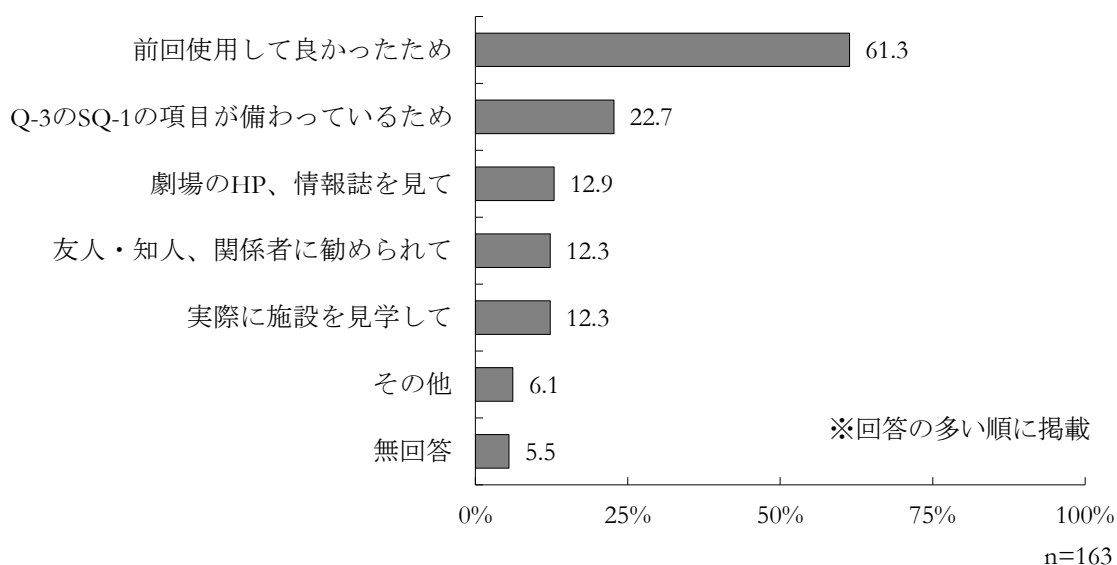


- 最も重視することは、「立地がよいこと」(28.2%・46件)への回答が最も多く、次いで、「ホールの規模が適切」(27.0%・44件)「分野に適したホール特性」(22.7%・37件)となっている。

(6)利用のきっかけ(p.資-77)

- 利用のきっかけは、「前回使用して良かったため」への回答が最も多く、61.3%(100件)を占めている。利用者の劇場への満足度は高く、そのため、リピーターの利用が多いことがうかがえる。
- 次いで、「Q-3のSQ-1(利用の際、重視する)の項目が備わっているため」(22.7%・37件)となっており、「立地がよいこと」、「ホール規模が適切」といった上位項目が劇場利用のきっかけになっていると考えられる。

図表3-8 利用のきっかけ



第4章 経済波及効果とパブリシティ効果

劇場の経営は、様々な経済効果を生み出し、地域の活性化を促すと言われている。ここでは、昨年度調査と同様、経済波及効果について、産業連関表を用いた分析を行うとともに、パブリシティ効果について、その概要と金額換算による規模の把握を行った。

1. 経済波及効果

劇場の運営にともなう経済波及効果には、劇場および観客の支出からなる最終需要（直接的経済効果）、それに伴う生産増、そしてそれらがもたらす所得増、雇用増、税収増などが考えられる。

11年度も例年どおり、産業連関表に基づいた経済波及効果に加え、雇用効果を試算した。

(1) 北九州芸術劇場の経済波及効果の基本構造と分析方法

- 経済波及効果をもたらす支出（最終需要）は、
 - ①劇場の管理運営に関する支出
 - ②劇場の主催事業に関する支出
 - ③劇場の主催事業の観客の消費支出
 - ④貸館事業の主催者の事業支出
 - ⑤貸館事業の観客の消費支出の5つに分類することができる（図表4-1参照）。
- 今回の調査では、①、②については劇場の運営データに基づいて、③については観客アンケートの調査結果に基づいて把握・推計を行った。
- ④については貸館事業者からのデータ提供が必要であるが、調査対象となっていないため、貸館事業の1公演あたりの支出を、主催事業1公演あたりの支出の20%もしくは30%と想定して、この二つのケースについて、支出額を試算した。
- また、主催事業の観客アンケート調査の結果をみると、北九州市内だけではなく、九州全域や他の地域からも幅広く観客を集めているのに対し、貸館の事業内容をみると、同じように幅広いエリアからの集客や、同じような消費活動を行っているとは考えにくいため、⑤については、③のデータを援用して試算した。
- したがって、④、⑤の計算結果については、あくまでも参考値である。
- また、これらの計算結果のうち、北九州市内の経済波及効果と福岡県の雇用表の就業係数、雇用係数を用いて、北九州芸術劇場がどのぐらいの雇用効果を有しているかを試算した。

(2) 分野別の最終需要と経済波及効果、雇用効果

- 上記①から⑤の分野別に見た最終需要と、産業連関表を使った経済波及効果の計算結果は、図表4-1に示したとおりである。①劇場の管理運営、②劇場の主催事業、③主催事業の観客の消費支出にともなう最終需要の金額は、それぞれ6億6,300万円、2億3,200万円、1億4,400万円、合計で10億3,900万円となっている。そのうち、69.4%にあたる約7億2,200万円が北九州市内での最終需要である。
- これら最終需要に伴う経済波及効果は、①が9億3,600万円、②が3億7,600万円、③が2億2,600万円、合計で15億3,800万円である。そのうち、64.4%にあたる9億9,000万円が北九州市内での経済波及効果である。生産誘発係数は、全体で1.48、北九州市内で1.37である。
- 参考値ではあるが、貸館の事業主催者の支出および貸館事業の観客の消費支出による経済波及効果（北九州市内のみ）は、約7億1,700万円～7億9,600万円、生産誘発係数は1.39

～1.40である。

- それらをあわせた経済波及効果の総合計は、約22億5,400万円～23億3,400万円で生産誘発係数は1.45、北九州市内に限ってみると、約17億700万円～17億8,700万円で生産誘発係数は1.38となっている。
- また、これら経済波及効果の結果から試算した雇用効果は、就業者数(労働量)では148～158人、雇用者数(有給の役員・雇用者数、常勤・臨時含む)で129～135人で、対事業所サービス、対個人サービス、商業などの分野を中心に雇用効果が現れている。

図表4-1 北九州芸術劇場の経済波及効果、雇用効果(11年度)

		最終需要	経済波及効果	誘発係数
管理運営・主催事業	①管理運営 事務局経費、委託費、光熱水費、その他	6億6,300万円 (5億8,000万円)	9億3,600万円 (7億9,400万円)	1.41 (1.37)
	②主催事業 出演料、創作スタッフ費、音楽費、製作費(交通費、宿泊費、食費、制作雑費)、宣伝費、記録費、予備費	2億3,200万円 (6,700万円)	3億7,600万円 (9,300万円)	1.62 (1.40)
	③主催事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	1億4,400万円 (7,500万円)	2億2,600万円 (1億400万円)	1.57 (1.38)
	小計	10億3,900万円 (7億2,200万円)	15億3,800万円 (9億9,000万円)	1.48 (1.37)
貸館事業(参考値)	④貸館事業(貸館主催者の支出) 出演料、製作費、その他	1億1,600万円 ～1億7,400万円	1億5,900万円 ～2億3,900万円	1.37
	⑤貸館事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費	3億9,800万円	5億5,800万円	1.40
	小計(参考値)	5億1,400万円 ～5億7,200万円	7億1,700万円 ～7億9,600万円	1.39 ～1.40
合計(参考値)		15億5,300万円 ～16億1,100万円 (12億3,500万円 ～12億9,300万円)	22億5,400万円 ～23億3,400万円 (17億700万円 ～17億8,700万円)	1.45 (1.38)
		雇用効果 (北九州市内)	148～158人(就業者ベース) 129～135人(雇用者ベース)	

注) 下段の括弧内の数字は、北九州市内の最終需要、経済波及効果。貸館事業については、最終需要、経済波及効果とも北九州市内のみと想定した試算結果である。また、各データは四捨五入した数字のため、小計、合計の数値が各データの合計と合わない箇所がある。

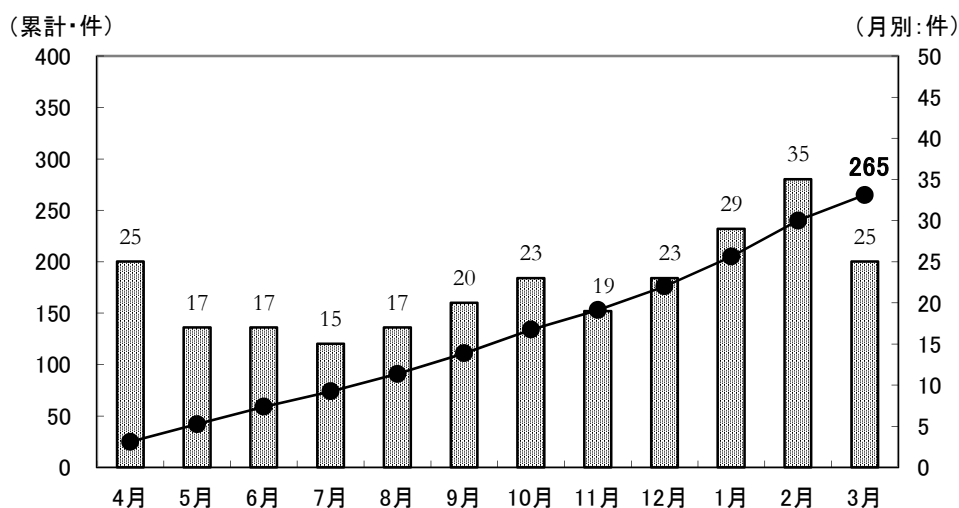
2. パブリシティ効果

文化的な催しや劇場運営においては、新聞や雑誌への記事掲載やテレビ報道などによって、地域の認知度向上やイメージアップが図られるケースが多く、それらは「パブリシティ効果」と呼ばれている。そして、その効果は、記事の大きさなどを基準にした広告宣伝費を目安にして、しばしば金額換算される。本事業評価調査では、03年度から新聞記事に焦点を当てたパブリシティ効果を算出しており、11年度も継続してパブリシティ効果の算出を行なった。

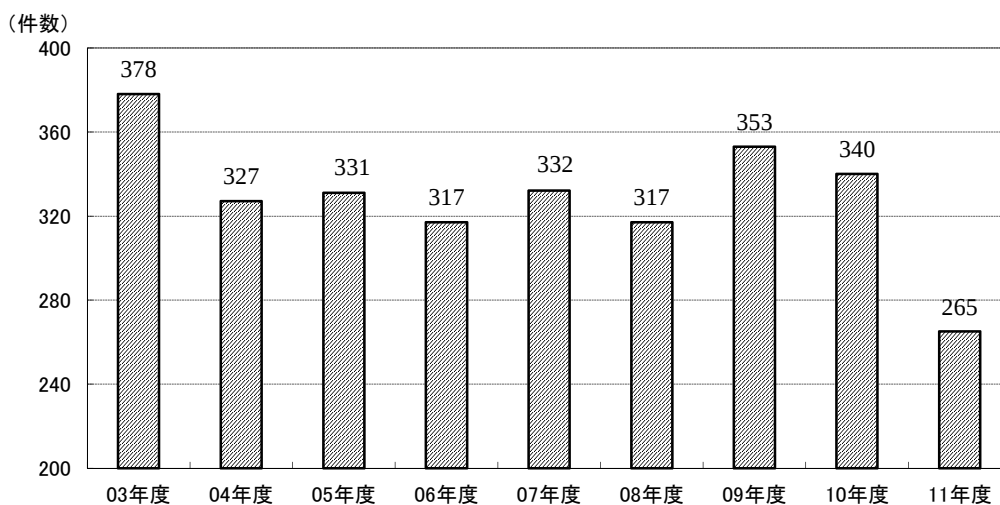
(1) 「北九州芸術劇場」をキーワードとした11年度の掲載記事の件数と内容

- 11年度についてみると、「北九州芸術劇場」をキーワードに検索された新聞記事の件数は265件(図表4-2)である。
- 03年度は開館年度ということで話題性が高く、掲載記事の件数も多かった。04年度以降は、「北九州芸術劇場」を会場とするイベントや関連記事、北九州芸術劇場の事業に関する記事がコンスタントに掲載されている。11年度は過去最少の掲載件数となったが、その要因は2011年3月11日に発生した東日本大震災を扱った記事が、2011年度の上半期を通じて長期紙面を占めたことが考えられる(図表4-3)。

図表4-2 月ごとの掲載件数と累計(11年度)



図表4-3 年度ごとの新聞記事掲載件数の推移(03年度～11年度)



資料) 図表4-2、4-3ともに「日経テレコン」記事検索の結果より作成

- 新聞別に見ると、11年度で掲載が最も多いのは西日本新聞(101件)、次いで、朝日新聞(59件)、毎日新聞(33件)、読売新聞(28件)、日経新聞(18件)となっている。その他、九州各県をはじめとする地方新聞は26件となっている(図表4-4)。

図表4-4 新聞別件数一覧(03年度～11年度)

	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度
西日本新聞	151	147	149	149	120	119	131	146	101
朝日新聞	78	52	48	60	74	62	80	73	59
毎日新聞	58	31	34	20	32	33	43	30	33
読売新聞	40	61	46	31	28	36	45	31	28
日本経済新聞	34	32	37	37	50	41	34	35	18
その他	17	4	17	20	28	26	20	25	26
計	378	327	331	317	332	317	353	340	265

資料)「日経テレコン」記事検索の結果に基づく

- これら記事を、
 - ① 北九州芸術劇場の公演紹介・取材記事、劇評など
 - ② 北九州芸術劇場のPRキャンペーン、劇場主催事業の紹介記事
 - ③ 情報コーナーなどでの公演情報の提供等
 - ④ 芸術文化以外のイベント、講演の紹介記事(会場名が「北九州芸術劇場」)
 - ⑤ 情報コーナーなどでの芸術文化以外のイベントの情報提供(会場名が「北九州芸術劇場」)
 の5種類に分類し、北九州芸術劇場として記事性の高い①、②、および③のうち公演の内容紹介が掲載されている情報提供を抽出したところ、106件であった(10年度:187件)。
- その内容を、「自主事業／提携・協力事業」、「学芸事業」、「貸館事業」、「その他(劇場全般、劇場職員への取材記事等)」に分類すると、それぞれ、41件、8件、42件、15件であった(図表4-5)。

(2) 広告掲載料をベースとした金額換算と評価

- これら106件の掲載記事について広告掲載料をベースに金額換算すると、約9,280万円という結果となっている(図表4-5)。
- 03年度は開館、04年度は「とびうめ国文祭」で話題性が高く、掲載記事の件数・文字量が多かったため、換算金額も高くなった。
- 05年度は全国展開型の創造事業の公演数が多く、06年度は朝日舞台芸術賞グランプリを獲得し、全国紙の掲載件数が多かった。広告の単価は全国紙で高いため、05年度と06年度は全体の掲載件数は突出して多くはないが、換算金額が高いという結果になっている。
- 07年度以降は、コンスタントに劇場事業や関係する劇団の記事などが掲載されるようになっている。
- 11年度の掲載内容をみると、西日本新聞、朝日新聞(西部)、読売新聞(西部)での演劇や舞台に関する批評・紹介欄で、公演事業に関する記事が掲載されている。九州他県の地方紙でも紹介されており、北九州市域外での劇場事業の定着が新聞記事からうかがえる。
- 11年度では、「テトラポット」、「GGR」、「山海塾」といった公演事業の紹介記事のほか、12年度に予定されている公演事業の「THE BEE」に関する記事が早々に掲載されていることが

特徴となっている。また、貸館事業に関する紹介記事では、東日本大震災に関連する慈善活動の公演が数多く紹介されている。

- 11年度の劇場事業に対する北九州市の補助金は約8,100万円であり、劇場事業のパブリシティ効果(約9,280万円)は補助金の規模を上回る成果を生み出していると言える。

図表4-5 新聞掲載記事の内容と金額換算(03年度～11年度)

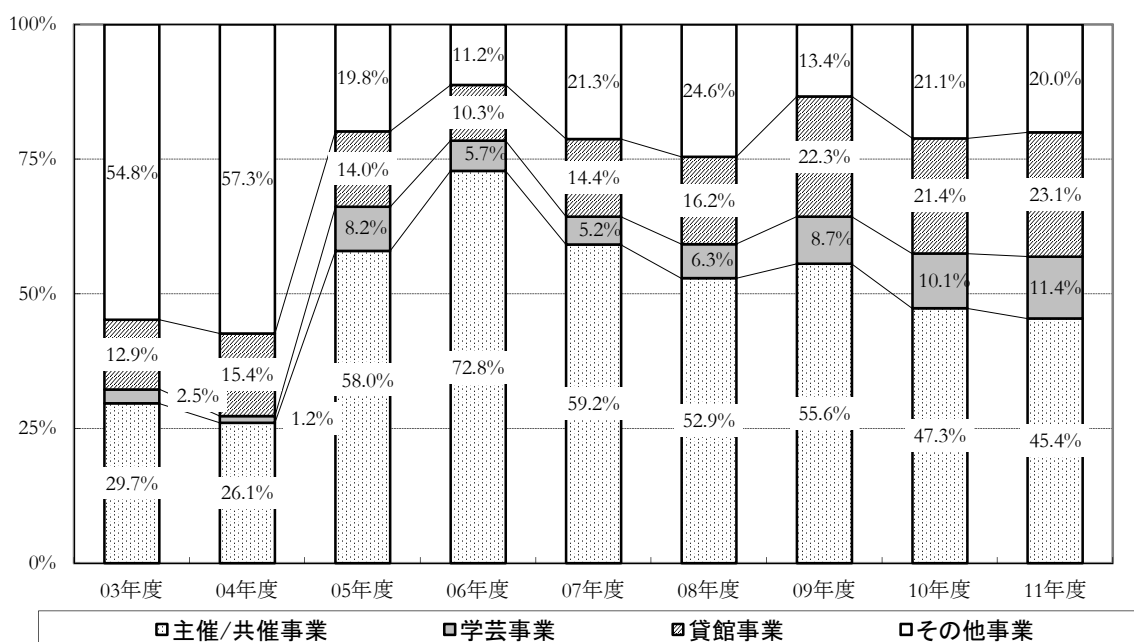
	2003年度		2004年度		2005年度	
	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)
主催/共催事業	70	62,140	54	46,211	75	110,044
学芸事業	8	5,331	5	2,141	25	15,505
貸館事業	46	27,072	43	27,235	34	26,622
その他事業	56	114,683	61	101,577	25	37,678
計	180	209,226	163	177,164	159	189,849

	2006年度		2007年度		2008年度	
	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)
主催/共催事業	88	160,243	85	66,027	55	66,588
学芸事業	17	12,451	12	5,777	12	7,926
貸館事業	35	22,741	31	16,056	50	20,392
その他事業	23	24,680	26	23,737	32	30,961
計	163	220,115	154	111,597	149	125,867

	2009年度		2010年度		2011年度	
	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)	掲載件数	金額換算(千円)
主催/共催事業	86	65,542	82	64,078	41	42,162
学芸事業	11	10,316	28	13,718	8	10,621
貸館事業	57	26,293	55	28,986	42	21,443
その他事業	23	15,755	22	28,598	15	18,563
計	177	117,905	187	135,380	106	92,789

注) 金額換算は、写真を含めた記事面積と各新聞社の広告掲載料に基づいて、計算・集計した。

図表4-6 事業ごとの掲載割合 [金額換算値ベース](03年度～11年度)



第5章 評価フレームに基づいた事業評価結果

最後に、2003年度から11年度までの9ヶ年の北九州芸術劇場の事業評価結果をとりまとめた。07年度までは、初年度(2003年度)の調査研究で設定した事業評価の基本フレームで整理していたが、08年度に、(財)地域創造の「公立ホール・公立劇場の評価指針」(2007年3月)の評価フレームに基づいて再整理し、今年度もそれに沿ってとりまとめを行った。

1. 評価フレームの考え方

「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレームは、「A.設置目的」、「B.管理運営」、「C.経営」という3つの戦略・評価軸を設定し、それぞれに評価大項目(戦略目標)を設定、さらに評価中項目(戦略)とそれを評価するための評価指標・基準を設定している。

図表5-1は、A、B、C、3つの戦略・評価軸の評価大項目を整理したものである。

図表5-1 「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレーム(評価軸と評価大項目)

戦略・評価軸		No	評価大項目
A	劇場の設置目的	A-0	劇場のミッション
		A-1	鑑賞系事業
		A-2	創造系事業
		A-3	普及系事業①:主に劇場内で実施するワークショップや講座など
		A-4	普及系事業②:アウトリーチ(学校、福祉施設等との連携など)
		A-5	市民文化活動支援(市民参加型事業、アマチュア支援など)
		A-6	地域への貢献①(地域経済への波及効果など)
		A-7	地域への貢献②(地域アピール、ブランド力のアップなど)
		A-8	広域施設としての役割発揮
B	管理運営	B-1	場の提供・支援(貸館)
		B-2	施設のホスピタリティ・サービス
		B-3	施設の維持管理
C	経営	C-1	経営体制
		C-2	リサーチ&マーケティング
		C-3	経営努力

- 11年度は、上記図表5-1の基本フレームに基づいて、03年度から11年度の9ヶ年で把握したデータや情報をあらためて整理した。

2. 評価結果の概要

基本フレームの評価項目ごとの評価結果は、図表5-3に一覧表として整理し、そのポイントを以下に記述した。 ※割合(%)の記載は、小数点以下を四捨五入して掲載した(図表5-3も同様)。

A. 劇場の設置目的

A-0 ミッション 「創る」「育つ」「観る」

①劇場の運営方針(ミッション)の有無と内容、ミッションの浸透の状況等

- 劇場では開館初年度から、「創る」「育つ」「観る」の3つの運営方針を設定している。
- 11年度も、3つの運営方針に基づき、北九州からの発信と地元演劇人の発掘、育成を意識した創造事業、舞台関係者の育成や子どもや学校、一般市民などを対象とした積極的な学芸事業、小劇場・現代演劇に多様なラインナップを揃えた公演事業を展開し、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業が一体となった事業を実施している。
- 10年度に実施した座談会では「地域文化振興における北九州芸術劇場の役割」というテーマを設定したところ、市内の美術、建築、伝統工芸の専門家が、地域における劇場の存在意義を高く評価していることがわかった。舞台芸術分野に限らず多様な地域文化の担い手が、劇場の事業や運営を信頼していることがうかがえる。

②劇場の運営方針を支持する市民の割合(市民の支持率)

- 観客の運営方針への支持率(※)は、「創る」「育つ」「観る」いずれについても、開館の03年度から継続して90%を超えている。

※「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

③劇場の来場者(利用者)数

- 北九州芸術劇場への年間来場者(利用者)数は、05年度以降、毎年27～28万人で推移しているが、11年度は約29万人となった。また、この9年間で利用者数は延べ253万人を超えた。11年4月1日現在の北九州市の人口(推計値)は約97万3,000人であり、すでに人口の2.5倍以上の利用者が来場したことになる。
- 開館以来、北九州劇場を地域になくしてはならない施設として定着させていくために積み重ねてきた事業や運営の成果が利用者数の安定にも表れてきており、今後も引き続き、5年後、10年後を見据えた長期的な事業の展開と継続が必要であろう。

A-1 鑑賞系事業 「観る」

「観る」: 観る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

①ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施

- 11年度も、「観る」(鑑賞事業)では、中劇場を中心とした小劇場・現代演劇、話題性・芸術性の高い現代舞踊など幅広いラインナップの公演が行われ、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場している。

②年間延べ観客数

- 11年度の公演事業については、19事業で42回の公演が行われた。入場者数は14,036人、入場率は87%である。
- 創造事業、提携・協力事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、33事業、公演回数は135回。入場者数は28,716人、入場率は87%となっている。

③公演に対する観客の満足度

- 観客調査の結果から公演(主催／提携・協力事業)に対する観客の満足度をみると、開館年度(03年度)から継続して「(本日の)公演内容」への満足度の高さが顕著である。11年度も満足層の割合(※)は98%で、そのうち「たいへん満足」の割合が57%と、観客からの高い

評価を得ている。なお、この公演に対する観客の満足度には、次項の「創造系事業」も含まれる。

※「たいへん満足」＋「まあ満足」の割合。無回答を除く。

- あわせて、「(本日の)公演のチケット料金」も満足層の割合は93%以上であり、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映されていると考えられる。

④鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価

- 09年度に実施した九州圏域の劇場・演劇関係者へのグループインタビューでは、魅力的な作品を招聘しているという評価や、東京や大阪からの演劇作品の受け皿として、九州圏域の代表的な劇場であるという共通認識がある。
- 09年度のグループインタビューで、九州圏域の劇場関係者・演劇人や首都圏の劇場関係者ともに、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合に連携や機能分担が重要になるだろうという点は共通認識であった。北九州芸術劇場としては、市外からの観客層に影響が出ることは十分考えられるため、「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」との意見も出された。

A-2 創造系事業 「創る」

〔創る〕：北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。

①ミッションに基づいた創造系事業の実施

- 11年度も、全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な創造系事業が実施された。
- プロデュース作品「江戸の青空 弐」は東京(11回)、廿日市(1回)、北九州(4回)で公演が行われた。
- 入場率では「テトラポット」の東京公演で99%、「リーディングセッションvol.18」で98%となっている。「江戸の青空 弐」の廿日市公演が54%となっているが、それ以外の公演の入場率は80%を超え、市民からの支持の高さがうかがえる。
- 開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、創造系事業を効果的に実施し、地域に根付かせていこうとする努力の成果がうかがえる。また、プロデュース作品の東京などでの公演によって、北九州芸術劇場の全国発信に貢献している。

②年間延べ観客数

- 11年度、「創る」では、5事業で37回の公演が行われ、入場者は10,846人、入場率は平均で85%と高い入場率となっている。

③創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果

- 10年度の座談会では、例えば劇場と美術館との共同制作や、伝統工芸を取り入れた衣装や舞台美術のデザインなど、舞台芸術以外の分野との協働の可能性について意見が寄せられた。それと同時に、そうした協働を可能とするための土壌として、地域の文化資源のデータベースが必要だとの意見も出された。
- 09年度の首都圏の劇場関係者によるグループインタビューでは、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられていた。また、九州圏域の劇場関係者や演劇人も共通して北九州芸術劇場の次なる目標として期待しているのは、アジアとの国際交流や創造・発信への取り組みであった。

A-3 普及系事業①:主に劇場内で実施するワークショップや講座など

〔育つ〕:アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。

①ミッションに基づいた普及系事業の実施

- 「育つ」については、劇場に学芸係を設置し、普及系事業を継続的に実施している。11年度は、
 - 「アーティスト往来プログラム」として、演劇・ダンス分野から多彩な講師を招いた「インリーチ」、「アウトリーチ」、「勉強会」
 - 創造参加として、合唱物語「わたしの青い鳥2011」、「北九州パントマイム教室」といった、市民が舞台芸術に触れる機会や創造参加への機会の提供に取り組んでいる。
- 11年度からの「アーティスト往来プログラム」は、同じアーティストが「アウトリーチ」と「インリーチ」でアプローチの対象や内容を変化させることで、劇場と学校や地域との間に、より多様な関係を生み出そうとする意図がうかがえる。

②年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数

- 11年度に実施した「アーティスト往来プログラム」では、教職員を対象にしたインリーチを3回、インターンやアシスタントを対象にした勉強会を3回、創造工房での社会人対象のワークショップを2回行った。これらのアクティビティの参加人数は84人であった。

A-4 普及系事業②:アウトリーチ(学校、福祉施設等との連携など)

①他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容

- 09年度に、小学生から一般市民を対象としたアウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業を立ち上げ、地域との連携を強化した。11年度は3ヶ年計画の3年目で、20回のワークショップで参加延人数が440人、公演「冬の盆」は2回行い、242人の入場者であった。
- 11年度に実施した「アーティスト往来プログラム」では、練習施設や公園でのダンスのワークショップを3回行い、参加人数は61人であった。

②学校等と連携したプログラム数と参加人数

- 11年度に実施した「アーティスト往来プログラム」では、市内の小学校、高校、企業で演劇やダンスのワークショップを16回行い、参加人数は408人であった。

A-5 市民文化活動支援(市民参加型事業、アマチュア支援など)

①ミッションに基づいた市民活動支援の実施

- 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業を実施しており、11年度は、「ツドエmeets北九州vol.6『わが星』」、合唱物語「わたしの青い鳥2011」、「北九州パントマイム教室」、「内藤裕敬(南河内万歳一座)高校生向けレクチャー」など、8事業で33回のワークショップとアウトリーチが実施された。参加延人数・入場者数の合計は1,823人。
- 合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」(08年度以前は「北九州パントマイムフェスティバル」)は開館の03年度あるいは04年度から継続実施されている事業である。11年度の入場率も80%以上と高く、市民に定着していることがうかがえる。
- 10年度の座談会では、「わたしの青い鳥」について「参加した人たちが楽しかったことを

次々に伝えていくことで、喜びを共有する市民が増えている」との評価があった。

②貸館事業に関するサービス内容、質への評価(専門的・技術的なアドバイスやサービスなど)

- 貸館利用者を対象とするアンケート調査で専門的・技術的サービスに関わる項目をみると、「技術スタッフの対応がよかった(技術的な助言や援助は適切だった)」は99%と、満足層の割合は大変高い。関連する項目として、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台設備・機器は充実している」をみても、満足層の割合は99%以上となっている。これらの項目では、「はい」という積極的な評価も高い。
- 劇場の専門的な技術サービスについては、利用者から高い信頼と評価を受けており、自由回答の書き込みも、それを裏付ける内容が多い(なお、09年度からテクニカルアドバイザーによるアドバイスの提供など、公演・講演に対する支援体制が強化された。)

A-6 地域への貢献①(地域経済などへの波及効果)

①地域外からの来場者割合

- 観客アンケート結果をみると、07年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市を初めとする九州各地、山口県など)からの来場者の割合が増えた(06年度:21%、07年度:31%、08年度:31%、09年度:33%、10年度:37%)が、10年度をピークに11年度は減少した(11年度:34%)。

②公演鑑賞に伴う消費行動

- 観客アンケートから鑑賞前後の消費行動をみると、11年度の飲食またはショッピングをした人の割合は56%で、毎年ほぼ60%で推移している。
- 飲食をしている割合は46%で平均金額は約1,500円、ショッピングをしている割合は24%で平均金額は約4,900円となっている。

③経済波及効果

- 上記公演鑑賞に伴う消費行動も含めた11年度の経済波及効果を算出すると、最終需要は、劇場の管理運営が約6.6億円、主催事業が約2.3億円、主催事業の観客の消費支出が約1.4億円となっている。
- それらの経済波及効果は、約15.4億円である。
- また、データ収集の制約から参考値ではあるが、貸館事業に基づいた経済波及効果については、最終需要が約5.1～5.7億円、経済波及効果が約7.2～8.0億円である。
- 経済波及効果の誘発係数は、管理運営と主催事業(観客消費支出含む)で1.48、貸館を含めると1.45となっている。試算を始めた04年度以降、管理運営・主催事業の誘発係数は1.45～1.48となっており、北九州芸術劇場の運営は、相応の経済波及効果をもたらしていることが明らかとなっている。
- 雇用効果については、就業者ベースで148～158人、雇用者ベースで129～135人という結果となっている。

A-7 地域への貢献②(地域アピール、ブランド力のアップ)

①シビックプライドの醸成

- 北九州芸術劇場は、北九州市のシンボルとして市民の支持が広がっており、舞台芸術の愛好家でなくとも市民の誇り(シビックプライド)の一部となっていることは、10年度の座談会出席者の共通認識であった。その上で、劇場には北九州市全体の「文化の結節点」としての役割に期待が寄せられている。

②パブリシティ効果

- パブリシティ効果についてみると、北九州芸術劇場や劇場事業に関する11年度の記事掲載件数は106件である。開館からの9年間のうち11年度は、過去最少の掲載件数となったが、その要因は東日本大震災を扱った記事が長期間紙面を占めたことが考えられる。
- 新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、11年度は約9,300万円となる。
- 11年度の劇場事業に対する北九州市の補助金は約8,100万円であり、劇場事業のパブリシティ効果は補助金の規模を上回る成果を生み出していると言える。

A-8 広域施設としての役割発揮

①圏域内の市町村の劇場・ホールとの積極的な連携

- 09年度に実施した九州圏域の劇場・演劇関係者へのグループインタビューでは、舞台の専門家が少ない地域の公立ホールや公立劇場で、「困ったときには北九州芸術劇場に相談したり、北九州芸術劇場を手本とする」といった意見が聞かれた。
- また、「創る」「育つ」事業で九州圏域における演劇人の人材育成に貢献しており、北九州芸術劇場のプロデュース作品の九州圏域での巡回公演の可能性について期待する意見も多い。

②当該文化施設の運営だけにとらわれない圏域全体の文化振興

- 北九州芸術劇場の事業や運営は福岡市にも波及している。「福岡のみならず九州圏域で、今後、どのように棲み分けや連携ができるのか、検討が必要」との九州圏域の劇場・演劇関係者の意見が聞かれた。
- 今後の北九州芸術劇場あるいは(財)北九州市芸術文化振興財団の長期的なビジョンには、地域版アーツカウンシルとしての役割や機能を視野に入れることが期待されるが、09年度のグループインタビュー調査では、九州圏域全体の舞台芸術環境を視野に入れたアーツカウンシルが求められていることが分かった。

B. 管理運営

B-1 場の提供・支援(貸館)

①ミッションに基づいた貸館事業の実施

- 貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づけられている。

②貸館事業における入場者数

- 11年度の貸館の公演・講演事業数は254事業。計337回の公演・講演が実施され、入場者数は175,916人となっている。

③利用者の満足度

- 貸館利用者を対象とした利用者調査の結果では、劇場利用に関する総合的な満足度[※]は99%で、利用者のほぼ全員が満足している。また、今後の利用意向[※]も98%と高いことは、満足度の高さの現れといえよう。
- 具体的な項目をみても、スタッフの応対や説明などソフト面に対する満足度[※]は、「現在の開館時間は適当である」を除いて約95%以上と非常に高い。また、「はい」という積極的な評価の割合も高い。

※ 「はい」+「どちらかと言えば『はい』」の割合。無回答は除く。

- 05年度(利用者調査開始年度)以降、項目ごとに満足度は上下しているが、常に高い満足度を維持するべく、利用者の苦情や要望に対する劇場スタッフの前向きな対応の成果がうかがえる。

B-2 施設のホスピタリティ・サービス

①公演や催し物情報に関する満足度

- 開館年度(03年度)に満足度が65%であった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、11年度は90%(06年度:79%、07年度:81%、08年度:86%、09年度:87%、10年度:85%)となっている。開館から9年が経過し、観客が劇場に慣れてきたこともあろうが、劇場側の情報発信への工夫や努力も大きいと思われる。

②ホスピタリティに関する満足度

- 03年度に満足度が69%であった「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、11年度は90%(06年度:79%、07年度:82%、08年度:87%、09年度:88%、10年度:89%)とさらに上昇している。
- 満足度の上昇は、①公演や催し物情報に関する満足度と同様に、開館から9年が経過し、観客が劇場に慣れてきたこともあろうが、案内表示の増設や既存サインの大型化など、劇場側の工夫によるところも大きいといえる。
- 「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、11年度は97%となっている。

③スタッフの対応や電話対応等に関する満足度

- 03年度から満足度の高かった「劇場係員の対応」は、継続して高い満足度を保っており、11年度も99%と、満足層の割合はほぼ100%近い。また、「電話予約・チケットカウンターの対応」についても満足度は97%で、劇場の顧客対応は高い評価を受けている。今後も高い満足度の維持に向けた取り組みが望まれる。
- 「チケットの予約・購入のしやすさ」は、03年度は53%と満足度項目のうち最も低かったが、04年度に73%に上昇、その後年々満足度は上昇し、オンラインチケット購入システムを導入した11年度は90%となっている。

④飲食に関する満足度

- 劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移してきたが、07年度に80%に達し、11年度は88%となっている。

B-3 施設の維持管理

①施設の維持管理

- 貸館利用者を対象としたアンケート調査をみても、劇場の施設や設備などのハード面で高い満足度となっている。特に、「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい」、「舞台設備・機器は充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」については、「はい」への回答が90%以上と大変高い評価となっている。また、05年度(利用者調査開始年度)以降、多くの項目で満足度は向上しており、劇場スタッフの努力がうかがえる。

②稼働率

- 施設稼働率は、大ホールが77%、中劇場が74%、小劇場が78%である。
- 開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70～80%で推移しており、2011年度の(財)地域創造の悉皆調査結果(2010年10月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令

市施設の平均稼働率は72%)と比較しても高い水準にある。

C. 経営

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ&マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

C-3 経営努力

①外部資金、チケット収入の割合

- 北九州芸術劇場の11年度の事業費は約2億3,000万円。財源内訳をみると、チケット収入が全体の53%、市の補助金が35%、文化庁と(財)地域創造、協賛金による外部資金が12%となっている。
- チケット収入の割合は、2007年の(財)地域創造の悉皆調査結果による全国平均の試算値(事業収入:37%)を大幅に上回っている。外部資金の割合についても、北九州芸術劇場の実績は全国平均(11%)を上回っている。

②事業収支からみた経営努力

- 事業収支面でも、開館以来培ってきた交渉力や事業の効率性の向上、交通費や宿泊費に関する積極的な経費削減(団体割引の適用等)の努力が行われていることが数字からうかがえる。
- 11年度の事業費の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差が事業収入で約1,700万円の減収、補助金等収入は約5,600万円の減収となっており、事業規模が縮小した結果、収入も減少した形になった。

3. 事業評価の結果から－今後の事業評価の方向性と検討課題

北九州芸術劇場の事業評価調査では、03年度の開館年度から図表5-2のと通りの調査を行ってきた。

図表5-2 北九州芸術劇場における実施調査

調査内容	03 年 度	04 年 度	05 年 度	06 年 度	07 年 度	08 年 度	09 年 度	10 年 度	11 年 度
【継続調査】									
劇場運営基礎データの収集・分析									→
観客調査(アンケート)									→
貸館利用者を対象としたアンケート調査 (実施:05年度～、整理・分析:07年度)									→
経済波及効果の算出									→
パブリシティ効果の把握									→
【テーマ調査】									
専門家による座談会(開場から1年間の 劇場運営の成果について)		○							
市民意識調査(アンケート)			○						
ワークショップ参加者を対象とした学芸調 査(アンケート/グループインタビュー)		○							
学校を対象とした学芸調査(アンケート)					○				
(舞台芸術の公演による)劇場使用者へ のグループインタビュー				○					
劇場スタッフへのグループインタビュー						○			
北九州芸術劇場の広域的役割と長期的 ビジョンに関するグループインタビュー							○		
舞台芸術以外の分野から見た北九州芸 術劇場の役割(座談会)								○	

最後に、今後の事業評価を継続する上で、検討・留意すべきだと考えられる事項を、次の7点に整理した。

①継続調査

経年変化による劇場運営、事業に関する満足度やニーズの分析のためにも、上記5つの

継続調査を引き続き実施し、データや情報を蓄積することが望まれる。

②地域や市民への効果を把握するための定性調査

また、劇場が地域や市民に与える波及効果や影響を把握するため、定性調査の実施も検討したい。近年、劇場と地域との連携がより強く求められる中、①観客(あるいはチケットクラブ会員)、②創造事業や市民参加事業に参加した市民、③地域(市民センターなど)でのアウトリーチ事業参加者などを対象としたグループインタビューや聞き取り調査を行い、劇場運営や事業に関する詳細な意見、成果を把握する機会が必要だと考えられる。また、05年度の市民意識調査の実施から7年が経過していることから、今後タイミングを見て、同様の市民調査の実施を検討する必要があるだろう。

③劇場内部での事業評価の活用

08年度の劇場スタッフへのグループインタビューからは、①この事業評価調査の結果も含めて、劇場内で蓄積しているデータを有効に活用していくこと、②評価結果について、係を越えた情報共有や振返りの機会を持つこと、が必要だという声が多かった。今後は、評価本来の目的である PDCA サイクル(Plan→Do→Check→Action)をより有効に機能させるためにも、事業評価調査の結果を現場での業務の振返りに有効活用するとともに、データの収集や整理にあたって、スタッフのより積極的な関わりを促していくことが重要だと考えられる。

④評価結果の公表と発信

北九州芸術劇場は、ホームページ上で劇場の運営方針を広く周知し、事業評価調査の報告書(本編)をホームページで公開するなど、市民へのアカウントビリティに努めている。今後、評価結果も含め、劇場運営や事業の成果に関する市民への情報発信をより一層強化するとともに、市民からの意見を聴取するためのしくみづくりを検討していく必要があるだろう。また、開館10周年という節目の時期が近づく中で、これだけの長期間の評価の蓄積は、全国の公立文化施設や文化政策にとっても意義深い取り組みだと言える。公共劇場や文化関係者の間でその成果を共有するためにも、より積極的な公表や発信が望まれる。

⑤次の戦略構築への活用

また、次の北九州芸術劇場の戦略構築のために、これまでの事業評価の結果を活用することが望まれる。09年度のグループインタビュー調査、前年度の座談会では、これまでの劇場の事業や運営を高く評価するとともに、それらを継続するだけではなく、次の目標設定とそれに向けた取り組みの必要性を指摘する意見があった。開館から9年半が経過し、開館当初に設定した目標が徐々に達成されつつあることを考えると、ミッションの再確認や見直し、それに基づいた事業や運営方針の再検討も視野に入れた取り組みが期待される。

⑥事業評価の再構築

前述した「次の北九州芸術劇場の戦略」に基づく事業評価の再構築も視野に入りたい。戦略や目標を設定し直せば、その評価のあり方も再検討する必要がある。この数年間、劇場に対する観客や貸館利用者の評価は、多くの項目で高評価となっている一方で、批評的な観点からの課題や新たな要望が見えにくくなっている点も否めない。また、観客や利用者以外の市民、舞台芸術以外の芸術分野、あるいは劇場周辺の地域を越えて、多様なステークホルダー(利害関係者)との関係を広げていくことが前年度の座談会でも期待されている。そのためにも、評価の視点、指標のあり方、分析手法などについて見直し、評価フレームを次の段階へと進めることが望まれる。

⑦次の10年を見据えた総括

北九州芸術劇場は、来年8月に開館10周年を迎える。これまでの事業評価の結果を見ると、その間、北九州芸術劇場は、積極的な事業や運営を継続、進化させ、それが観客をはじめとした市民や地域からの評価に結びついてきたと言える。開館後数年間で減速する公共劇場が少なくない中、10年間、開館当初のコンセプトに基づいて一定水準の事業や運営を継続してきたこと自体、高く評価すべきであろう。その実績に甘んじることなく、次の10年の継続とさらなる飛躍を達成するためには、最初の10年間の事業や運営の成果、評価を総括することが、何よりも重要になるものと考えられる。

図表5-3 政策評価フレームに基づいた評価結果一覧

※この評価結果一覧は、(財)地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～11年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。

※事業評価の結果を、定量評価(事業実績データ、アンケート調査データ)とともに、定性評価(グループインタビュー等)の結果も含めて総合的に整理した。

※「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準を網羅することを目的とはせず、基本フレームを活用することにより、北九州芸術劇場の事業実績や運営の状況を、体系的に把握することを目的としている。

※したがって、「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準とはすべてが一致するものではない。また、段階評価(達成度合いを自己点検できる解説式のモデル指標)項目については、劇場内部の自己評価であることから本報告書では掲載対象外としている。

A:劇場の設置目的

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-0	【ミッション】 「創る」 「育つ」 「観る」	① 劇場の運営方針(ミッション)の有無と内容、ミッションの浸透の状況等	- 劇場では、開館年度から「創る」「育つ」「観る」の3つを運営方針として設定。 [専門家との座談会/10年度]では、市内の美術、建築、伝統工芸の専門家が、地域における劇場の存在意義を高く評価していることがわかった。舞台芸術分野に限らず多様な地域文化の担い手が、劇場の事業や運営を信頼していることがうかがえる。	3つの運営方針への支持率は、観客、市民、九州圏域や全国の劇場関係者からも高い。 - 一方で、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくべきとの意見も。	- 劇場内部での、事業評価結果を活用したPDCAサイクルの実現のための議論の場の設定、きっかけづくり。 - 観客調査の継続。 - 長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 - 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 「次なる目標」としての事業方針と、その評価手法の検討。
		② 劇場の運営方針を支持する市民の割合(市民の支持率)	- 運営方針への観客からの支持率は、「創る」「育つ」「観る」いずれも開館年(03年)度から90%以上。 ○11年度 創る:96%、育つ:95%、観る:99% [観客調査/11年度] - 一般市民からの支持率も、「創る」「育つ」「観る」いずれについても80%以上。 ○創る:81%、育つ:90%、観る:90% [市民調査/05年度] ※ 支持率は、「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。割合(%)は小数点以下を四捨五入して掲載。		
		③ 事業や運営に対する自己評価や振返り、運営データの蓄積	業務の振返り、データを蓄積・活用して評価や業務にフィードバックしていくことが必要だという認識が高い。[劇場スタッフへのグルイン/08年度]	事業評価データ等を活用し、係を超えた振返りの機会づくりが必要。	
		④ 市民の劇場の認知度や劇場への意見	- 市民の劇場の認知度(劇場があることを「知っている」と回答した割合)は84%、知っている場合の来場・利用率は44%、来場したことがない場合の今後の来場意向は78%。 [市民調査/05年度] - 劇場に来場経験を持つ市民を増やすこと、劇場の存在を肯定的に考えてくれる市民を増やすことは、劇場スタッフへのグルインでも、業務を超えた共通の問題意識。 [劇場スタッフへのグルイン/08年度]	運営方針に基づいた長期的な事業の継続により、地域に浸透。	
		⑤ 劇場の来場者(利用者)数	年間来場者(利用者)数は、05年度から09年度まで毎年27～28万人で推移。10年度は1年間で31万人に増加したが、11年度は29万人。開館からの9年間で延べ254万人が来場。	北九州市の人口(11年4月1日現在)は約97万3,000人であり、すでに人口の2.5倍以上の利用者が来場。	
A-1	【鑑賞系事業】 「観る」 観る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供します	① ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施	- 小劇場・現代演劇、ダンス・現代舞踊、ミュージカル・商業演劇など幅広いラインナップの公演事業を実施。 09年度から北九州芸術劇場が注目する演劇人たちをバックアップする「ツドエmeets北九州」を立ち上げた。 - 多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場。 ○年齢層 29歳未満:21%、30歳代:24%、40歳代:27%、50歳代:17%、60歳以上:12% 平均年齢:41歳。 ○北九州芸術劇場での鑑賞経験 今日が初めて:21%、1～2回:13%、3～5回:20%、6回以上:39% - 北九州市域外(北九州市内+北九州近隣地域を除く)からの観客が10年度をピークに11年度は減少。 ○06年度:21% ⇒07:31% ⇒08:31% ⇒09:33% ⇒10:37% ⇒11:34% [観客調査/11年度]	- 小劇場・現代演劇を中心に、幅広い事業構成で、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客を集客。 - 公演事業全体で極めて高い入場率。	- 観客調査の継続。 - 観客の意識やニーズを詳細に把握するための調査の実施。 - 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		② 年間延べ観客数	11年度の公演事業は19事業、公演回数は42回、入場者数は14,036人である。入場率は87%。 - 創造事業、提携・協力事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、33事業、公演回数は135回、入場者数は28,716人である。入場率は87%。		
		③ 公演に対する観客の満足度	- 開館年から「公演内容」への満足度の高さが顕著。満足層の割合は98%。「公演のチケット料金」への満足度も高く、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映していると考えられる。 - 満足層の割合(「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。) ○公演内容 03年度:96%⇒04:96%⇒05:97%⇒06:97%⇒07:98%⇒08:97%⇒09:98%⇒10:97%⇒11:98% ○公演のチケット料金 03年度:86%⇒04:88%⇒05:92%⇒06:90%⇒ 07:92%⇒08:93%⇒09:93%⇒10:91%⇒11:94% [観客調査/11年度] 「絶対にいい公演が来てくれる」という信頼感が生まれているとの評価があった。その信頼感によって、北九州以外の他の都市からの観客を北九州市に吸引しているとの意見があった。[専門家との座談会/10年度]	「観る」に対する観客・市民の支持率、公演内容に関する観客の満足度も極めて高い。	
		④ 鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価	- 公演事業での劇場使用者からも、劇場の運営方針や実施事業への支援の声、期待の声が大きい。特に、劇場スタッフの対応については、人間関係・信頼関係が作れる劇場であるとの評価が高い。[劇場使用者を対象としたグルイン/06年度] [九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度]でも、魅力的なものを呼んでいるという評価や、東京や大阪からの演劇作品の受け皿として、九州圏域の代表的な劇場であるという共通認識がある。 [全国の劇場関係者へのグルイン/09年度]では、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合、市外からの観客層に影響が出ることは十分考えられるため、「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」との意見も出された。	「観る」という方針では、福岡市と何らかの機能分担をした上で、「創る」や「育つ」に重点を置いていくことも、将来のひとつの方向性だと考えられる。 - 公演事業の質に対する信頼感の形成と、他都市からの観客の吸引力。 - 中長期的な市域内と市域外との集客バランスの検討。	

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-2	【創造系事業】 「創る」 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していきます	① ミッションに基づいた創造系事業の実施	・全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業が実施されている。 ・開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、効果的に事業を展開している。 ・プロデュース作品「江戸の青空 弐」は東京(11回)、廿日市(1回)で公演を行った。	・高い入場率を確保。市民に事業が定着していること、地域からの注目度の高さがうかがえる。 ・「創る」に関する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 ・九州圏域や全国に視野を広げても、北九州芸術劇場の「創る」事業には大きな期待が寄せられている。 ・今後の北九州芸術劇場の運営にとって、アジアとのつながりは重要な戦略の一つと考えられる。 ・美術館との共同制作など、舞台芸術以外の分野との協働の模索。	・観客調査の継続。 ・創造系事業参加者の意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 ・有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		② 年間延べ観客数	・11年度は、5事業で37回の公演が行われ、入場者は10,846人。入場率では平均で85%。 ・「テトラポット」の東京公演で99%、「リーディングセッションvol.18」で98%となっている。創造系事業の全5事業で入場率は80%を超えている。		
		③ 創造系事業の公演に対する観客の満足度	・鑑賞系事業③を参照		
		④ 創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果	・北九州・福岡の若手劇団・カンパニーから「劇団相互、あるいは北九州・福岡の連携が強まった」、「役者や劇団のレベルアップになった」と評価。[劇場使用者を対象としたグルイン/06年度] ・[九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度]でも、利用の自由度の高さやスタッフの専門性の高さが評価されている。 ・[専門家との座談会/10年度]では、舞台芸術以外の分野との協働の可能性について意見が寄せられた。それと同時に、そうした協働を可能とするための土壌として、地域の文化資源のデータベースが必要だとの意見も出された。 ・[全国の劇場関係者へのグルイン/09年度]では、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられていた。また、次なる目標としてアジアとの国際交流や創造・発信への取り組みが期待されている。		
A-3	【育つ】 アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域とともに育っていく劇場を目指します 【普及系事業①】 主に劇場内で実施するワークショップや講座など	① ミッションに基づいた普及系事業の実施	・劇場内に学芸係を設置し、普及系事業を継続的に実施。11年度も、 ○「アーティスト往来プログラム」として、多彩な講師を招いた「インリーチ」、「アウトリーチ」、「勉強会」 ○創造参加として、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」、「公共ホール演劇ネットワーク事業」などの多様なプログラムを実施。 ・11年度からの「アーティスト往来プログラム」は、同じアーティストが「アウトリーチ」と「インリーチ」でアプローチの対象や内容を変化させることで、劇場と学校や地域との間に、より多様な関係を生み出そうとする意図がうかがえる。	・「育つ」に対する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 ・ワークショップや講座参加者の事業に対する満足度は極めて高く、参加したことで鑑賞活動や日常生活の中に多様な効果が生まれている。 ・学校との連携事業については、演劇を活用した事業が子どもたちの表現力やコミュニケーション力への効果に期待が高い。長期的な視点で、まず事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。 ・地域と連携した事業については、演劇を活用した事業が地域コミュニティに及ぼす効果など、長期的な視点で、事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。	・事業参加者、関係する地域・施設等を対象とした意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 ・有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 ・長期継続の学芸事業による定量的・定性的な成果を把握するための調査の検討。
		② 年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数	・11年度は、11事業、96回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数の合計は3,568人。 ※受講(入場)者数でカウントすると1,260人 ・10年度と比べると、アクティビティの回数、参加者数ともに減少している。		
		③ 講座・ワークショップ参加者の満足度	・講座・ワークショップ参加者の事業に関する評価はたいへん高い。[学芸調査・アンケート/04年度] ○参加者の講座やワークショップに対する総合的な満足度 満足層:98%、うち「たいへん満足」:56% ○「たいへん満足」の割合が高い項目 講座・ワークショップの内容(63%)、講師(72%)、劇場係員の応対(63%)		
		④ 参加者が事業から得たもの(事業の効果)ー講座・ワークショップ	・講座やワークショップに参加したことで、参加者は次のような効果があったと感じている。[学芸調査・アンケート/04年度] 「人間関係に広がり生まれた」(67%)、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」(65%)、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」(57%)、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」(50%)、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」(43%)など。 ・グルーブインタビューでも、鑑賞事業だけでは得られない深い効果を指摘する声が多い。[学芸調査・グルイン/04年度] ・11年度に実施した「アーティスト往来プログラム」では、教職員、インターンやアシスタント、社会人対象の勉強会やワークショップ等を8回行い、参加人数は84人であった。		
A-4	【普及系事業②】 アウトリーチ(学校、福祉施設等との連携など)	① 他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容	・09年度から小学生から一般市民を対象としたアウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業を立ち上げ、地域との連携を強化した。11年度は3ヶ年計画の3年目で、20回のワークショップで参加延人数が440人、公演「冬の盆」は2回行い、242人の入場者であった。 ・11年度に実施した「アーティスト往来プログラム」では、練習施設や公園でのダンスのワークショップを3回行い、参加人数は61人であった。		
		② 学校等と連携したプログラム数と参加者数	・学校との連携事業への評価 [小学校を対象としたアンケート調査/07年度] ○事業経験者の約8割は、演劇を活用した事業が子どもたちに与える効果を実感。 ○具体的には、 ・自分の考えや気持ちを表現する力:80% ・豊かな感受性や想像力:61% ・人とコミュニケーションする力:52% については、効果を実感している先生が多い。 ○先生自身も「子どもたちそれぞれの個性や能力をより理解できるようになった」(72%)等の効果を実感。 ○事業に参加した先生では、今後の劇場との連携の意向も高い(連携したいと思う割合:83%)。 ・11年度に実施した「アーティスト往来プログラム」では、市内の小中学校、高校、企業で演劇やダンスのワークショップを16回行い、参加人数は408人であった。		

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-5	[市民文化活動支援] 市民参加型事業、貸館事業におけるアマチュア支援など	① ミッションに基づいた市民活動支援の実施	- 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業やアウトリーチを実施。 11年度は、創造参加として、「ツドエmeets北九州vol.6『わが星』」、合唱物語「わたしの青い鳥2011」、「北九州パントマイム教室」、「内藤裕敬(南河内万歳一座)高校生向けレクチャー」などの8事業で33回のワークショップとアウトリーチが実施された。参加延人数・入場者数の合計は1,823人。 「わたしの青い鳥2011」、「北九州パントマイム教室」の2事業は、03年度、04年度からの継続事業。 [専門家との座談会/10年度]では、「わたしの青い鳥」について「参加した人たちが楽しかったことを次々に伝えていくことで、喜びを共有する市民が増えている」と高く評価。	- 市民参加型事業には継続事業が多く、市民からの支持がうかがえる。 - 貸館事業における専門的、技術的支援については、ほぼ100%の高い評価。	- 貸館調査の継続。 - 市民参加型事業、アマチュア支援に関する調査手法の検討。 - 開館以降継続してきた事業の参加者に対するインパクト(直接的・間接的な波及効果)を把握するための調査の検討。
		② 貸館事業に関するサービス内容、質への評価(専門的・技術的なアドバイスやサービスなど)	- 貸館利用者への専門的・技術的アドバイスについては、「技術スタッフの対応がよかった」は99%の大変高い満足度。 - 関連する項目として、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台設備・機器が充実している」も、それぞれ90%以上の高い満足度。[貸館調査/11年度]		
A-6	[地域への貢献①] 地域経済などへの波及効果	① 地域外からの来場者割合	06年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市を初めとする九州各地、山口県など)からの来場者の割合が増加を続けたが、10年度をピークに11年度は減少した。 ○地域外からの来場者割合 06年度:21%⇒07:31%⇒08:31%⇒09:33%⇒10:37%⇒11:34% [観客調査/11年度] - 地域外からの来場者は、ダンス・現代舞踊、小劇場・現代演劇で割合が多い。	- 北九州市域外からの来場者が増加していることは、舞台芸術の鑑賞拠点としての北九州芸術劇場の認知度、評価が向上しているものと考えられる。 - 観劇に伴う観客の消費活動も活発。劇場の事業規模に応じた経済効果が発生している。 - 今後、集客のためにも、より劇場と地域(北九州の街、近隣商店街、大学等)との連携を深めるための、積極的な方策の検討が望まれる。	- 地域(地域経済)への波及効果の測定手法、評価項目の検討。 - 継続調査の実施、精度アップ(劇場管理運営費、事業費の振り分け、観客消費支出の精度アップ)。 - 所得増、雇用増、税収増の試算。 - 貸館事業に伴う経済波及効果の精度アップ(貸館事業者、貸館事業観客へのアンケート調査)。 - 開館以降の地域(地域経済)へのインパクト(直接的・間接的な波及効果)を把握するための調査の検討。
		② 公演鑑賞に伴う消費行動	- 鑑賞前後のショッピングの消費行動をみると、11年度の飲食・ショッピングをしている人の割合は56%。毎年ほぼ60%で推移。 - 飲食をしている場合の平均金額は約1,500円、ショッピングの場合は約4,900円。[観客調査/11年度]		
		③ 経済波及効果	11年度の経済波及効果を算出すると、 ○最終需要 劇場の管理運営:約6.6億円、主催事業:約2.3億円、主催事業の観客の消費支出:約1.4億円(参考値)貸館事業に基づいた最終需要:約5.1～5.7億円 ※試算 ○経済波及効果 約15.3億円(参考値)貸館事業に基づいた経済波及効果:約7.2～8.0億円 ※試算 - 経済波及効果の誘発係数は、 ○管理運営・主催事業・主催事業観客消費支出:1.48 ○貸館を含めた消費支出:1.45 04年度以降、運営管理・主催事業の誘発係数は、事業規模により1.45～1.48で推移。 - 雇用効果は、就業者ベースで148～158人、雇用者ベースで129～135人。		

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-7	[地域への貢献②] 地域アピール、ブランド力のアップ	① シビックプライドの醸成	- 北九州芸術劇場は、北九州市のシンボルとして市民の支持が広がっており、舞台芸術の愛好家でなくとも市民の誇り(シビックプライド)の一部となっていることは、10年度の座談会出席者の共通認識であった。 - その上で、劇場には北九州市全体の「文化の結節点」としての役割に期待が寄せられている。[専門家との座談会/10年度]	毎月コンスタントに掲載されていること、全国紙・地方紙でも事業が紹介されていることなど、劇場事業の定着と広がり进行评估。	- より精緻なパブリシティ効果の測定手法、および劇場の情報発信力を把握する評価手法の検討。 ・長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 ・市民の劇場への意識・ニーズをより詳細に把握するための評価手法の検討。
		② パブリシティ効果	- 北九州芸術劇場や劇場事業に関する11年度の記事掲載件数は106件で、過去最少の掲載件数となったが、その要因は東日本大震災を扱った記事が長期間紙面を占めたことが考えられる。 106件の新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、11年度は約9,300万円(10年度:約1億3,500万円)。 「テトラボット」、「GGR」、「山海塾」といった公演事業の紹介記事のほか、12年度予定の「THE BEE」に関する記事が早々に掲載されていることが特徴。また、貸館事業に関する紹介記事で、東日本大震災に関連する慈善活動の公演が数多く紹介されている。	新聞掲載記事の広告宣伝費への換算金額は、市の事業に対する補助金(約8,100万円)を上回る規模であり、北九州芸術劇場の事業や運営が高いパブリシティ効果を生み出している。	
		③ 劇場・ホールの存在を肯定的に考えている市民の割合	- 市民調査では、「これからの時代に必要な施設である」(46%)、「市の文化行政のシンボル」(35%)といった肯定的な意見への回答割合が高い。 - 劇場開設の効果として、鑑賞機会や日常生活の中で芸術文化に触れる機会が増えたとする市民が多い。 - 一方で、「情報が限られており、どんなことをやっているのかわかりにくい」という意見も多い(44%)。[市民調査/05年度] - 劇場スタッフのインタビューでは、広い北九州市の中でどのように地域に劇場や舞台芸術を浸透させていくのか、劇場を応援してくれる市民をどのように増やしていくのかが、今後の検討課題としてあがっている。[劇場スタッフへのグルイン/08年度]	- 北九州芸術劇場に関して、肯定的な意見が多いことは高く評価。一方、広い北九州市域の中で、劇場や劇場事業に関する情報をいかに市民に届けるかが検討課題。 ・北九州のシンボル、シビックプライドとしての評価の高まり。	
A-8	[広域施設の役割発揮] 圏域内の他施設の活動や文化振興に対する支援者の役割を果たします *「広域施設」とは主に都道府県立の公立ホール・公立劇場を想定	① 圏域内の市町村の劇場・ホールとの積極的な連携	- 舞台の専門家が少ない地域の公立ホールや公立劇場で、困ったときには北九州芸術劇場に相談したり、北九州芸術劇場を手本とする取り組みが生まれている。 「シアターコラボ」「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」といった「創る」「育つ」事業で九州圏域における演劇人の人材育成に貢献しており、北九州芸術劇場のプロデュース作品の九州圏域での巡回公演の可能性について期待する意見も多い。[九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度]	今後、北九州芸術劇場が九州圏域に果たす役割には、より一層の期待が高まっている。	・「北九州モデル」としての成功を、他の地方自治体に発信・波及させながら、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくことが必要。 ・国や他の地方自治体(とくに九州圏域の県や市)との緩やかな連携も視野に入れて、地域版アーツカウンシルとしてのあるべき姿や北九州芸術劇場の位置づけを検討していくことが重要。
		② 当該文化施設の運営だけにとらわれない圏域全体の文化振興	- 北九州芸術劇場の事業が、福岡市にも波及している。福岡のみならず九州圏域で、今後、どのように棲み分けや連携ができるのか、検討が必要である。[九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度] - 国のアーツカウンシルとは別に、地域版アーツカウンシルのようなものが北九州の文化振興ヴィジョンの中に入っているが、どのようにリアリティを感じさせるようにするかが大きな課題。[全国の劇場関係者へのグルイン/09年度]	今後、北九州芸術劇場が九州圏域に果たす役割には、より一層の期待が高まっている。	

B:管理運営

※この評価結果一覧は、(財)地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～11年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
B-1	[場の提供・支援(貸館事業)]	① ミッションに基づいた貸館事業の実施	・貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づける方向性。	・総合的な満足度、今後の利用意向ともに100％近い割合であることは、利用者からの大きな評価。 ・貸館事業のソフトに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。	・貸館調査の継続。 ・利用者の満足度に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		① 貸館における入場者数	・11年度の貸館公演・講演は254事業。計337回の公演・講演が行われ、入場者数は175,916人。		
		② 利用者の満足度	・劇場利用に関する総合的な満足度は99%。今後の利用意向も99%と満足度はたいへん高い。 ・ソフトに関する関する12項目のうち、「開館時間が適当である」以外は、満足層の割合が95%以上。貸館事業におけるスタッフの応対への評価は高い。 [貸館調査/11年度] ・「事前打ち合わせが円滑」での「はい」の割合が、11年度では10年度に比べて7ポイント増加(10年度:82.8%⇒11年度:89.0%)している。		
B-2	[施設のホスピタリティ・サービス]	① 公演や催し物情報に関する満足度	・開館年度(03年度)に満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、11年度には90%以上の満足度となっている。 ○公演情報の入手のしやすさ 03年度:65%⇒04:73%⇒05:78%⇒06:79%⇒07:81%⇒08:86%⇒09:87%⇒10:85%⇒11:90% [観客調査/11年度]	・高い満足度は堅持し、低い満足度は大きく改善している。開館から9年が経過し、観客が劇場や鑑賞活動に慣れてきたこともあろうが、劇場側の工夫と努力が大きいと考えられる。 ・劇場のホスピタリティ・サービスに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。	・観客調査の継続。 ・観客の意識・満足度・ニーズ把握に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		② ホスピタリティに関する満足度	・開館年度に満足度が69%であった「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、11年度は90%に上昇。 ・「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、11年度は97%。 ○案内表示 03年度:69%⇒04:74%⇒05:77%⇒06:79%⇒07:82%⇒08:87%⇒09:88%⇒10:89%⇒11:90% ○デザイン・雰囲気 03年度:88%⇒04:91%⇒05:93%⇒06:93%⇒07:94%⇒08:95%⇒09:96%⇒10:96%⇒11:97% [観客調査/11年度]		
		③ スタッフの応対や電話応対等に関する満足度	・「劇場係員の応対」、「電話予約・チケットカウンターの応対」への満足度は大変高い。特に、「劇場係員の応対」については、開館年度から90%以上の満足度を維持している。 ・開館年度(03年度)に満足度が低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、11年度には90%の満足度となっている。 ○劇場係員の応対 03年度:92%⇒04:97%⇒05:98%⇒06:97%⇒07:97%⇒08:97%⇒09:98%⇒10:98%⇒11:99% ○電話・チケットカウンター 03年度:80%⇒04:91%⇒05:93%⇒06:92%⇒07:93%⇒08:95%⇒09:96%⇒10:96%⇒11:97% ○チケットの予約購入 03年度:53%⇒04:73%⇒05:79%⇒06:80%⇒07:83%⇒08:90%⇒09:86%⇒10:84%⇒11:90% [観客調査/11年度]		
		④ 飲食に関する満足度	・劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移してきたが、07年度に80%に達し、11年度は88%となっている。 ○飲食サービス 03年度:73%⇒04:78%⇒05:79%⇒06:77%⇒07:80%⇒08:83%⇒09:86%⇒10:86%⇒11:88% [観客調査/11年度]		
B-3	[施設の維持管理]	① 施設の維持管理	・貸館調査でも、劇場の施設や設備などハード面で利用者からの満足度は大変高いが、搬入・搬出のしやすさについては複合施設でエレベーターを使用することから、他の項目に較べて満足度は低い。満足層の割合は次のとおり。 ○館内は清潔に保たれていた:100% ○ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい:100% ○舞台設備・機器は充実している:100% ○設備・機器などを安全に使用できた:99% ○楽屋など舞台裏の施設が使いやすい:97% ○劇場の広さ(客席数)がちょうどよい:95% ○搬入・搬出がやりやすい:94% [貸館調査/11年度]	・劇場利用者からの施設・設備の維持管理に関する評価は大変高く、今後も安心・安全な施設利用への取り組みが望まれる。 ・スタッフからは、中長期の修繕計画が課題としてあげられている。	・貸館調査の継続。 ・利用者の評価に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 ・施設の維持管理に関する詳細調査の検討。
		② 稼働率	・施設稼働率は、大ホールが77%、中劇場が74%、小劇場が78%である。 ・開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70～80%で推移。全国平均(専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72%)と比較しても高い水準。		

C:経営

※この評価結果一覧は、(財)地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～11年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
C-3	【経営努力】	① 外部資金、チケット収入の割合	11年度事業費は約2億3,000万円。財源内訳は、チケット収入:約1億2,000万円(53%)、外部資金:約2,900万円(12%)、市の補助金:約8,100万円(35%)。 - チケット収入と外部資金の03年度からの比率をみると次のとおり。 ○チケット収入 03年度:54%⇒04:43%⇒05:37%⇒06:61%⇒07:52%⇒08:42%⇒09:65%⇒10:68%⇒11:53% ○外部資金 03年度:18%⇒04:20%⇒05:22%⇒06:14%⇒07:14%⇒08:15%⇒09:8%⇒10:15%⇒11:12% 全国平均の試算値と比較すると、チケット収入割合(全国平均:37%)が平均を大幅に上回る。外部資金の割合についても、北九州芸術劇場の実績が全国平均(11%)を上回っている。	・チケット収入の割合の高さなど、劇場の営業努力、運営努力の成果として評価。	・継続したデータ収集・分析の実施。 ・詳細調査の必要性の検討、実施。
		② 事業収支からみた経営努力	11年度の事業費の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差が事業収入で約1,700万円の減収、補助金等収入は約5,600万円の減収となっており、事業規模が縮小した結果、収入も減少した形になった。		

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ&マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

